

---

# よみがえった少女

山口多聞

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

よみがえった少女

### 【Zコード】

Z2643E

### 【作者名】

山口多聞

### 【あらすじ】

黒の組織によって暗殺された富野明美。その遺体は警察によって収容されたが・・・彼女の運命は誰もが思いもしない方向へと転がり始めた。

## 思惑（前書き）

久しぶりのコナン小説です。手元にコミックがないので、かなりいい加減になつて いるかもしませんが、よろしくお願ひします。

## 思惑

10億円強奪事件の実行犯の1人であり、黒の組織の科学者である富野志保の姉の富野明美は、ジンにより暗殺されたはずであった。そう、はずだった。

だが、運命とは複雑な糸の絡み合い。別の運命といいつゆの糸がいつ、どうでどうのようにな絡むかは、誰にもわからない。

その日、東京のある所轄署の監察医である黒岩京子は1人の女性の遺体が運び込まれてくるのを部下から教えられた。その報告に対して彼女はうなざりした。

「また仏さん？これで今日だけで3人目よ。いい加減にして欲しいわね。」

「いや、私に言われましても。」

上司の愚痴に対し、部下は苦笑いしながら言った。

「朝は孤独死した老人。昼は飛び降り自殺した男性。どうしてこうも人がポンポン死んで運び込まれてくるのよ。」

「知りませんよ。とりあえず報告しますね。仏さんは若い女性、なんでも10億円強奪事件の実行犯で、拳銃自殺したそうです。」

「また物騒な話ね。それで解剖の必要は？」

「事件は自殺として確定したそのので、必要ないそうです。」

日本では運び込まれる遺体が解剖される率が非常に低い。驚く事にわずか2%なのだ。警察側が事件を自殺など、死因を解剖までして調べる必要性がないと判断されれば、そのまま遺体は解剖されることなく火葬されてしまう。

「ふーん。じゃあいつもみたいに火葬して、遺骨は遺族にそのまま引き渡されることになるのかしら？」

「多分そうじやないです。まあ解剖する必要のないなら、一いちら

に仕事はありませんよ。」

数時間後、部下は勤務時間が終わつたために帰宅し、仕事が残つていた彼女は1人残つて仕事を続けていた。

「ふう、終わつた。」

彼女は仕事を終えると机を片付け、立ち上がつた。そしてそのまま帰宅するかと思いきや、出口とは反対の方向に歩き始めた。そして向かつた先は靈安室だつた。

彼女は辺りをキョロキョロ見回し、周りに誰もいないことを確認すると、靈安室の中に静かに入った。

ひんやりとした空氣に包まれている靈安室には、この日運び込まれた3体の遺体がならんでいた。内2体は既に毎間に確認している。彼女は夕方運び込まれたばかりである女性の遺体に近づいた。

「まだ死んで間もない。今なら。」

彼女はボソッとそう呟くと、鞄の中から爪切りとハサミ、小型のナイフを取り出した。そしてそれを使って遺体から爪と髪の毛、皮膚の一部を採取する。

これはもちろんやつてはいけない行為である。合理的な理由がなにままで遺体を傷つける事は死者に対する冒涜であるし、死体損壊である。遺族にばれれば裁判沙汰である。もちろん、彼女は監察医としての職を剥奪されること間違ひなしだ。

しかし彼女はそれを知つてか知らずか、表情一つ変えず黙々とそれを続けた。そして必要な分を取り終わると、それを持っていた小さなビニール袋に納め、鞄に忍ばせた。

すると今度はそれに入れ替える形で、なにやらスロープとコードが沢山ついた小型の機械の様な物を取り出した。コードの先には盤が付いていて、その盤を彼女は遺体の頭の部分に貼り付けた。そして機械の電源を入れた。

「動いて！」

彼女の願いが届いたかわからないが、スコープに波形が映った。

「やった！！

彼女は嬉しそうな表情をして機械をいじくる。2分ほどそのまま機械の操作を続けていたが、やがてそれも終えて機械を鞄の中にしまった。

全てが終わると、作業の際にとつた白い布を再び遺体の上に乗せなおし、彼女は遺体に向かって手を合わせて目を瞑つた。

「あなたの体と心を弄ぶことを、どうかお許しください。」

そう呟き、彼女は祈りを終えると部屋を出て帰宅した。

「ただいま。あなた、いる？」

帰宅した彼女は、夫を呼び出した。

「お帰り。」

彼女の夫、黒岩城太郎はすぐに玄関にやつてきた。今年32歳になる彼の仕事は私立大学の非常勤講師だ。もつとも、それは表の顔だ。

「求めていた物、手に入つたわよ。」

彼女は夫の顔を見るなりそう言った。他人が聞いただけでは容量を得ない言葉であるが、彼にはそれで充分だった。

「ほ、本当かい？ 遺族とかの問題は大丈夫か？」

「ええ。遺族はいないうから。恐らくこのまま火葬されて無縁仏になると思うわ。」

「そうか・・・その人には悪いけど、俺は科学者として自分の理論を確認したい。たとえそれが神をも恐れぬ所業であつても。」

そういう彼の表情には、どこか狂氣じみた物が浮かんでいた。

「早速今日の夜から作業を始めようと思つ丁度明日は授業もない日だから。それで、物は？」

「いいに。」

京子は鞄の中から、先ほど遺体から採取した髪の毛等の入ったビニール袋を取り出した。次いで、あの機械も取り出した。

「一応記憶も探つて来たわ。」

「そうか、ありがとう。誰にも見られなかつたか？」

「もちろん。」

「それなら良いね。」

そう言つて、彼は自分の研究室に籠つた。彼の本職は先ほども書いたが、大学の非常勤講師だ。そしてその専門分野は生物学、なかでもクローン生命体の製造技術だ。

彼が考えた独自の理論は、短期間でわずかな細胞から元の生命体を作り上げる画期的な物だつた。応用すれば、体の各部位を欠損した重傷者の治療に大いに役に立つ。反面、もう1人の同じ人間をいつも簡単に作り上げられることは、悪用されたり、また未だ議論未決着の生命倫理に大いに触れることとなる。

だからこそ、彼は妻以外にこの話をしていなかつた。だが、科学者としてのあくなき探究心が尽きる事はなく、彼は監察医である妻に頼んで、状態のよく、引き取り手のない遺体からの必要部位の採

取を頼んでいた。そして、ついにそれを得たのであった。

彼はそれを使って、今まで理論だけであった人間の複製を試みようとしていた。それがパンドラの箱を開けることとなるのか、それとも彼の理論をただ裏付けるだけで終わるのかわからないままに。

## 思惑（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

## 新しい命

時は前話から一気に飛んで3ヶ月後。

「これ以上成長しないのか？」

異端の科学者である滝城太郎は、自分の研究室で首を捻っていた。彼の目の前には、大きな培養槽があり、その中には1人の少女が浮かんでいた。彼女こそ、先日警察署の遺体から採取した髪などを元にして造られたクローン体だった。

実験はほぼ成功と言つてよく、今の所異常は見られなかつた。しかし、ここに来て問題が発生した。体の成長が8歳程度でストップしてしまつたのである。

「もう1週間も変化がないもんな・・・やつぱりこれ以上は無理かな？」

成長しないのならば、これ以上培養槽に浸けておく必要はない。

「引き上げるか。」

彼はなんとはなしに言つたが、ここからが一番緊張する時である。なにせあくまで今回やつている事は全て理論上の実験段階に過ぎない事なのだ。何が起こるかわからない。もしかしたら引き上げた途端分子レベルでバラバラになつてしまつなどといふ、漫画のようなことだって起こりえるのだ。

とりあえず、手伝つてもらつたために彼は妻の京子を呼んだ。1人

では引き上げる事は出来るが、何か起きた時に対処できないからだ。

まず培養槽の中の培養液を抜いていく。満杯だと引き上げにいくからだ。そして半分ほどの水位になつたところで、防護服を着込んだ城太郎が培養槽の中へと降りて、少女の体を慎重に引き上げる。液から引き上げる時は緊張したが、幸いにも少女の体に変化はなく、そのまま培養槽の外でタオルを持つて待っていた京子へと渡す。

そして一端彼女に頼んで体を拭いて服を着せてもらう。その間に城太郎はもう一つの作業の準備に入った。それは記憶の操作である。

先日明美の遺体を京子がいじつたさいに、小型の機械を使って行なつていた作業は脳にある記憶を電気信号に変換して記憶する物であつた。幸い、死後時間が絶つていなかつたために、軽い電気ショックを脳に送つて記憶を引き出す事が出来た。もつとも、完全かはわからないが。

その記録した記憶を、今度はクローン体の方に植え付けるのである。何せ今そのまま目覚めさせても一切の記憶がない状態である。何かを覚えているどころか喋つたり歩いたりする基本的なことさえ出来ない可能性があつた。

そこで記憶を植え付けるのであるが、もしその記憶が死ぬ寸前の物まで完全に残つているのならば、目覚めた途端驚くに違いない。死んだと思ったら少女になつているのだから。しかも、自分の体を身勝手に複製されたと聞いたらもつと驚くだろう。もしかしたら怒るかもしね。

「その時は、俺が全責任取らなきやな。」

そんなことをしみじみと考えていると、京子が少女を抱きかかえてやつてきた。

「準備できた？」

「ああ。後は記憶を植え付けるだけだ。その娘に変わった事は？」

「今の所何もないわ。」

「大いに結構なことだな。」

そして少女を寝かせると、彼はその頭に複数のコードが付いた盤をつけた。これで準備完了だ。

「ようし、行くぞ！」

彼は機械を操作する。その隣では、京子が緊張の面持ちで作業を見守る。電源を入れ、異常がないかチェックし、ないと確認すると彼は一つのボタンに手を置いた。

「上手く行つてくれよ・・・」

彼はそのボタンを押した。その瞬間、機械についているメーターの針が動き、それと同時に少女が「うー」と小さくうめき、せりて表情を険しくした。

「「「！」？」」

2人とも心臓が飛び出るぐらいに驚いたが、すぐに少女が表情を戻し、静かに寝息を立て始める。安堵の息を漏らした。

「あとはこの娘が目覚めるのを待つだけだな。」

「ええ。」

2人はその娘を家の中で空いている部屋のベッドに移動させ寝かせた。あとは先ほど城太郎が言つたとおり、目覚めるのを待つだけである。

銃弾を受け倒れ、必死に痛みに耐えながらその後自分を追つてやつてきた少年にロッカーの鍵を渡した所で、いつたん全ての思考が停止して頭の中が真っ暗になった。それが自分の死の瞬間だと考える暇もなかつた。

ところが、突然再び激しい痛みと共に思考が動き始めた。

(え!?)

最初はかなり不鮮明な物だった。しかし時間が経つにつれて思考はより一層鮮明に、活発に動き始めた。

(どうこうこと?私は死んだんじゃ……)

体の感覚が戻つてくる気がした。彼女は、宮野明美は恐る恐る瞼を開いた。すると視界内に白い天井が入つてきた。また、肌に触れる感覚から自分が寝かされているのもわかつた。

首を傾げ、辺りを窺う。最後の記憶にあつた倉庫の中ではない。どこかの家の一室のようだつた。

彼女は思い切つて上半身を起こした。最初はこの光景も、体の感覚も冗談かと思った。しかし、今冗談ではないと確信した。全てが現実に存在する物だつた。

「生きてる・・・信じられない。」

久しぶりに喋つた言葉。それがより彼女に、自分は生きているという実感をもたらした。それと同時に違和感も。

（なんか、声が変な気が・・・）

なんとなく声が少し幼い感じがした。さらに、自分の手を目の前にもつてみると、さらに驚きが増す。その手はどう見ても少女の手だつた。

「どうして？」

死んだと思つたら生きていて、しかも自分の体は記憶にある物とは違う。こんな異様な状況人間そう簡単に出会いつものではない。おそらくこの世界では彼女が2人目だつ。

彼女が混乱しているその時、部屋の扉が開いた。その途端彼女は

そちらに顔を向けた。するとそこには30代前半ぐらいの女性が立っていた。

「あ、あなたは誰？」

明美が恐る恐る聞くと、京子は一瞬驚いたが、すぐにその表情は喜びの物になつた。

「あなた！目を覚ましたわよ……早く来て……」

「え！？え！？」

明美にはもう何がなんだかわからなかつた。そこへ、城太郎が息を切らし、走つてやつてきた。

「おお！…目を覚ましたんだね！…どこか痛い所はあるかね？…目眩や吐き気は？その他に何か自覚症状はあるかい？」

そんないきなり矢継ぎ早に言われても、混乱している状況ではすぐに対えられるはずがなかつた。

「あなた、そんないきなり沢山聞いても答えられないわよ。」

京子にたしなめられて、城太郎は冷静さを取り戻した。

「ああ、そうだった。いかんいかん。驚かしてすまない。私は黒岩城太郎。こつちは妻の京子だ。君の名前は？」

「み、宮野明美です。」

これが宮野明美が、生まれ変わった時の一瞬始終だった。

## 新しい命（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

## 新しい名前

とりあえず、3人はゆっくりと話が出来るように居間へと移動し、そこでお茶を飲みながら話合ひにこじた。

「ええと、じゃあまず明美さん。わたくしも書つたが、体に何か異常はないかね？」

城太郎が念のために確認を取る。

「は、はい。なんともありません。」

明美が多少緊張しながら答える。

「そうか。まあ今の君の体については未知数の部分が多いからね、また日を改めて病院でしつかり検査を受けたほうが良いかも知れない。」

そう言つと、彼はお茶を一口飲む。

「あ、あの。私は一体どうして生きているんですか？しかも子供の姿になつて。」

この時点では、明美はまだ自分の置かれている状況をしつかり説明されていなかつた。ただわかるのは、自分がただならぬ状況におかれているということだけだつた。

「ああ、君がその疑問を持つのは当然だね。確かに君は本来ならあの時死んだ筈の人間だつた。しかし私たちが生き返らせた。厳密に

は新しい体に作り変えたと言つた方があつてゐるね。

「どうじつじとですか！？」

「実はだ・・・」

城太郎は自分が科学者である事、自身で独自のクローン製造理論を考えたこと、そのために監察医の妻に頼んで警察に運び込まれた遺体から、クローンを造るのに必要な部分の採取を頼んだこととそれを基にしてクローン体を造つた事を説明した。

「そして、その基となつた遺体が君の死んだ時の体だつたということさ。ついでに、記憶もコピーしてその体に植え付けた。だから君は自分の名前を言えたし、今人として動けている。」

「やうじつじとだつたんですか。」

普通なら信じられないことである。しかし現実に彼女は今子供の体で生きているし、記憶も死ぬ寸前の物までしつかりとあつた。

「ただ、こちらのミスかはわからないが、何故かその歳までしか体が成長しなくてね、だから今の君は8歳前後の少女の体になつてゐるというわけや。」

「しかし、君には本当に悪い事をしたと思つてゐるよ。」

「えー？」

こきなり言われた言葉に、明美は少し困惑した。

「遺体や記憶を操作したということは、本来なら死者に対する冒瀧だからね。しかも死んでいたとはいって、君の意思を100%無視する事にもなつてしまつた。本当にすまない。」

城太郎は深々と頭を垂れた。

「や、そんな私は別に・・・」

明美にしてみれば、別に生き返つたことに何の不満もなかつた。逆に、妹である志保に再び会えるチャンスが出来たかもしれないし、もしかしたらあの忌々しい組織を潰せるかもしれない。だから嬉しい事はあつても

と、こゝで明美はあることを思い出した。

「せう言えば、今日つて何月何日ですか？」

すると、城太郎が頭を上げ、少し離れた場所にあるカレンダーを見て言つた。

「8月の17日だけ。」

「8月・・・3ヶ月経つたのか。」

「一体この3ヶ月の間に状況はどう変わつたのだろうか、妹は、そしてあの時鍵をたくしたコナン、いや工藤新一はどうなつたのか、気になることは山ほどあつた。」

「それで、問題は今後君をどうするかなんだ。以前の君の戸籍は既に抹消されているだろうから、新しい物を用意しなければならない。それについては私たちが用意するが良いかな？」

「はい。私には両親も家族もいないので。」

明美にはそれ以外に答えようがなかった。本当の親も死に、幽霊状態である今の彼女には彼らに頼る以外術はない。もつとも、家族がいないというのは嘘である。本当は黒の組織の科学者である志保がいるが、城太郎達の前で組織の事を言つるのは憚られた。例えそれが極些細な情報でも。

「そうか。それと君を生き返らせたのは我々だから、君の世話をする義務があると私は考えている。だから、君は我々の手で保護したいんだが、それで良いかな？」

これについても、明美には拒否権はないと言える。

「今の私には他に頼る人はいません。だからお願ひします。」

今度は明美がペコリと頭を下げた。

「そうか、じゃあこれからは是非かもしないけど、家族としてよろしく。」

「はい。」

すると、今まで話を離れて聞いていた京子が言つた。

「それでね明美さん。新しい戸籍を作る時には名前が必要になるん

だけど、その前の名前の方がよろしいかしら？」

そう言われて明美はしばし考えた。恐らく今の自分の体なら、組織が追つてくることはまずありえない。だから名字が変わるだけでも充分だ。

（けど・・・これから私はもつ富野明美じゃない。だったら・・・）

「いえ、新しい名前にしたいと思します。」

「そう。だつたら臥月わづかつて名前にしてくれないかしら？」

「えー？ 良いですか？」

すると、京子は少しばかり表情を暗くした。代わりに城太郎が答えた。

「臥月は、3年前に交通事故で死んだ私たちの娘なんだ。本当なら、今年8歳になるはずだったんだ。私のクローン理論もその時はまだ未完成でね。君みたいに甦らせることは出来なかつた。だからだよ。」

なるほど。つまり京子はその臥月という娘を明美に重ねて見ていいようだ。別に断る理由などない。むしろ、それはお礼の意味を込めて受け入れるべきと彼女は思った。

「そうですか・・・わかりました。その子自身ではありますけど。私が今日からその臥月ちゃんの代わりになります。」

「ありがとう。」

「ありがとう明美さん。」

2人が明美に向かつて頭を下げる。

「それでこれからなんだが、一応君の体は8歳程度だからね、学校に通つてもうことになるが、良いかな?」

学校となると小学校である。一応彼女にはちゃんと前の記憶があるから行く必要はない。しかし、これまで人生のほとんどを監視されてきた彼女にしてみれば、それから解放された学校生活というのは魅力的であった。たとえ本当の子供たちに混じつて学ぶ事となるても。

「はい。それで構いません。」

彼女ははつきりとそう答えた。

「そうか。じゃ あ夏休み明けの9月から通つてもうつ事になるね。ここから一番最寄の学校だと、帝丹小学校になるね。」

「えー? 帝丹小学校ですか?」

「ああ、 そ�だが。何か問題でもあるのかな?」

「いいえ。なんでも。」

そう誤魔化したが、 実際気になることは大いにあった。帝丹小学校といえば、あのコナンが通つていたはずである。もしかしたら会

う事になるかもしね。

( あの時はどんな顔をして余れば良いんだろ? )

そんなことをふと考へる明美、いやこれからは畢冉である。そんな彼女も、まさかその帝丹小学校に組織から脱走した妹が、幼児化して通つているなどとは予想も出来なかつた。

## 新しい名前（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

## 運命が交わる時

夏休みである8月も終わって、月は9月となつた。各小学校では2学期がスタートするわけだが、それは帝丹小学校でも同じである。そしてその3年の教室に、黒岩臥月と名を変えた宮野明美の姿があった。

「今日からこのクラスに加わる黒岩臥月さんです。」

担任の女教師が黒板に彼女の名を書く。

「黒岩臥月です。よろしくお願ひします。」

臥月はぱくぱくとお辞儀をした。すると生徒たちがパチパチと拍手をする。

（今日からここで勉強するんだ。変な気分。）

本当なら小学校で学ぶ事など2度とないはずであった。しかし、数奇な運命は彼女をこの場に誘つた。あの後、黒岩夫妻は一体どうやつたか知らないが、短期間で彼女の戸籍など、日常生活をする上で必要な公文書を全て手に入れ、そして帝丹小学校への转入手続きをした。ちなみに、3年への转入となつたのは、授業内容でなるべく暇しないようこという黒岩夫妻の配慮だった。

とにかく、こうして彼女は十数年ぶりにランデセルを背負つて、小学生としての新しいスタートを切つたのである。

「それじゃあ黒岩さんの席は窓側の一一番後ろね。」

「は、はい。」

担任に指示され、彼女は席に座った。木の机に木の椅子、窓から見える運動場の風景。全てが懐かしいようで、また新鮮だった。

（前はどんな時でも組織の監視がついていたけど、今はそれに気兼ねすることなく生きていけるのね。）

それが彼女にとつてはもっとも嬉しい事だった。後ろに視線がない、それだけで彼女の心は大いに弾む。ちなみに彼女はコナンの用に組織を潰すなどとは微塵も考えていない。というかそんな事は彼女一人で出来る筈がないし、それに自分を娘として迎えてくれた黒岩夫妻を巻き込むのも気が引けていたからだ。

（やついえば、）にはあのコナン君がいるのよね。出会つたら本当にどうしよう…

コナンが工藤新一であると言つ事はしつかりと記憶に残っている。感の鋭い彼なら例え小学生の姿の自分でもすぐに気付くかも知れない。

（会わないので無難かしら。）

彼女はそんなことを考えていた。

その日は転入生とあって、彼女は質問攻めとなつた。「どこから来たの？」「得意な勉強は？」「好きな事は？」etc。それらを一つ一つ答えながら、彼女は小学校1日目を乗り切つた。そしてこの日はコナンに無事（？）会つ事なく終わった。

翌日からは授業が本格的に始まった。小学校3年レベルの勉強は、彼女にとつて暇なものと暇でない物に区つきりと色分けされた。厳密に言えば暇な物が国語、算数で、暇でない物が理科、社会である。前者は元々彼女自身が大人であったからわかつて当たり前であるが、後者は長年勉強していないことで、忘れている事などもあつたから有意義な勉強となつた。

そんな感じで1週間、彼女は小学生としての生活を無難にこなして行つた。いじめに遭うような事もなく、勉強などもしっかりとこなし日々忠実していた。そして最大の変化と言えるのが、友人が出来た事であつた。

最初の2日間こそ生徒たちの興味の対象となつた皐月であつたが、3日もたつと子供たちは興味を失い、彼女は生徒の1人としてクラスに溶け込む事が出来た。そんな中で、熱心に彼女に接してきたのが菊地直江だつた。

皐月から見て右に2つ隣の彼女は、別に浮いていると言つ程ではないが、クラスの中では他人との交流が少ない人間だつた。そういうわけか、彼女は明美に積極的に接近してきた。

最初は少し煩わしいとも思えた皐月だつたが、直江のある点に惹かれ、その後良く会話することとなつた。

皐月が惹かれた直江のある点、それは彼女の好きな物が科学であつたことだ。そんな彼女に、皐月は妹の姿を重ね合わせたのであつた。

それが始まりで、今は途中まで一緒に帰るほど仲が良くなつた。

皐月にとつては人生で初めて心の底から交流できる友人であった。

そして帝丹小学校に転入して10日ほどした頃、2人が帰り道にお喋りしながら歩いていると、直江があることを話題に上げた。

「そう言えば、うちの学校には有名な子がいるんだよね。」

「誰よ?」

「1年生の江戸川コナン君と灰原哀ちゃんよ。」

その名を聞いて皐月の心に動搖が走ったが、なんとか表情には出さず、聞き返した。

「どんなことで有名なのよ?」

「2人とも1年生にしちゃやたら勉強が出来て、しかも雰囲気が大人っぽいわね。私も一度全校集会で見たことがあるけど、確かに只ならぬ感じはしたわね。」

(まあコナン君は工藤新一だからね。)

皐月は心の中でそんなことを考えた。

「あとコナン君つていつたら、今世間を騒がしている怪盗キッドから宝を何回も守った事で勇名ね。それにあの毛利名探偵の家に居候していて、一緒に色々な事件を解決しているって聞いたわ。他にも何人かで少年探偵団つて言うのを作つて、何件も事件を解決したつて言つし。」

「へえ、やうなんだ。」

（そんな目立つような行動して、大丈夫なのかしら？）

「もう1人の灰原哀つて子はどんな子なの？」

「彼女もコナン君と同じで勉強が凄く出来るらしいの。それと、赤みがかつた茶髪がとっても似合つてゐる可愛い子だつたわ。」

（赤みがかつた茶髪？）

それは妹の特徴であつた。しかし、そんな髪の人間世界中にいくらでもいるだろ？。すぐに自分の妹と繋げるのは短絡的であつた。

「そう。・・・そんな凄い子達なら私も一度見てみたいわね。」

皐月はそう言ってお茶を濁した。そして話題を変えた。

「ところで・・・」

しかし、彼女が言つたセリフは翌日には現実の物となるのであつた。

翌日、掃除当番の交代で、彼女を含む班の担当は1年生の教室に近い特別教室の掃除となつた。掃除事態は別に特別なことではなく、短時間で終わらせられる物であつた。皐月達も手早く掃除を終えると、さつさと教室へと戻り始めた。

そんな時、同じ班になつていた直江が皐月の袖を引っ張つた。

「皐月ちゃん、昨日会ったコナン君たちがあそこで話すナビ。」

「えー？」

皐月は少し驚きながら、言われた方向へと顔を向けた。するとそこには、コナンを含む男子3人に、女子2人の1年生グループがいた。しかし、皐月は女子の1人を見て凍り付いてしまった。

（嘘！？）

皐月が見つめた先にいる少女は、赤みがかった茶髪で、少しばかり鋭い感じの目元をしていた。子供の姿であるが、それは間違いない妹の宮野志保であった。

（どうして、どうして！？）

皐月が驚きのあまり固まっていると、その少女も皐月の方に気付いた。そして、彼女も皐月と同じように表情が凍りついた。まるで幽霊でも見ているかのよう。

「どうしたの皐月ちゃん？」

固まつた彼女に不審を抱いた直江が声を掛け、それによつて皐月は正気を取り戻した。

「あー、めん。」

「そろそろいかないと帰りの会に遅れるわよ。」

「そうね。」

2人はその場を足早に立ち去った。コナンと哀はそれを追いかけようとしたが、探偵団のメンバーに阻まれた。

運命の再会は、授業終了後の下校時間に持ち越された。

## 運命が交わる時（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

その日の下校時間。江戸川コナンと灰原哀は下駄箱の陰で隠れるようにして待っていた。いつもなら探偵団のメンバーと帰る2人であるが、この日はそれどころではなかつた。

掃除の最中に見かけた少女。その外見は死んだはずの宮野明美そつくりであった。もちろん、そつくりだけなら別にありえなくもない事だが、コナンと哀が気になるのはその少女がまるで幽霊でも見るかのような表情でこちらを見ていたことであつた。

2人にまさかの気持ちが生まれて当然であった。冷静に考えれば死人が生き返るなどということはあり得ない。しかし彼ら自身大人から子供の体へと逆行すると言つ信じられない事態を経験している身である。さらに哀からしてみれば、最愛の肉親が生きている事は希望が湧くことだ。

そういうわけで、彼らは怪しむ探偵団をなんとか先に帰らせて、先ほどの少女の正体を確かめるべく、出てくるのを待ち伏せして待つていた。

「感じからしてさつきの娘は2・3年生つて感じだったよな。じゃあそろそろ出でてくるはずだよな。」

コナンが腕時計で時間を確認しながら言つ。

「ええ。・・・工藤君はさつきの娘についてどう思つ?」

「まさかとは思つけど・・・お前のお姉さんに似ていたのは確かだ

し、それにこっちを見ていた時のあの表情も気になる。確かめなきや気が済まねえよ。お前だつてそうだろ?」

「そうだけど。死人が生きているなんてことあるのかしら?」

さつきは希望も湧いたが、いざ確認するとなるとやはり疑惑が出る。

「まあ確かめてみればわかるだろ?」

「ナンが哀を落ち着かせるためか、笑顔で言う。それによつて哀の心も少しばかり落ち着く。

「そうね。」

そして数分後、帰りの会が終わったのか、一斉に2・3年生の生徒たちが下校するために降りてきた。ナンと哀はその人の流れの中に先ほどの少女がいなか注視する。すると、3分ほどして哀が見つけた。

「いたわ!」

「ナンが哀の声で振り向くと、確かに先ほどの少女が友達だらうか、同じくらいの少女と共に靴を履き替えていた所であった。

「どうするの?」

哀がナンに尋ねる。

「……じゅ人が多すぎるし、友達と一緒にいる状況じゃ聞きたくない。」

尾行して1人なるのを待とづ。」

コナンが妥当な結論を出した。哀にも異論はなかつた。

「わかつたわ。」

じつして取りあえず、2人はその少女たちの尾行を開始した。

（）数日の日課となつてゐる直江との下校。皐月はいつもどおりの時間に帝丹小学校を出て、これまたいつもどおりにペちゃくちゃお喋りしながら歩いていく。皐月の家、つまり黒岩家まではだいたい子供の足で15分という所で、10分ほどを彼女と一緒に歩く。

いつもなら楽しい一時なのだが、明美の心には先ほどみたコナン

と妹そっくりの少女を見たときからのもやもやがあった。それでも、表面上はいつもどおりを装つた。だが、学校を出ると同時に、彼女は後ろから視線を感じた。

（尾行されてる。）

長年黒の組織につけられていた彼女は、自然とその気配を感じ取つた。

（組織の時に感じていた暗い感じとはなんとなく違つよつたな・・・）  
そんな事を考えていると、やはり表情に出たのか直江が声を掛け  
て来た。

「皋月ちゃん、どうしたの？顔が少し怖いけど。」

「えー？あー？」めだ。ちょっと気になることがあつたから。

「気になること？」

直江が怪訝な顔をした。

「うん。ナビ、大したことじゃないから。それより、お話を続きをし  
ましょ。」

「なり良いけど。」

ありがたいことに、直江はそれ以上の追及はしてこなかつた。

明美はつけられているのに気付いた心を押し殺して、直江との会

話を続けた。せつかく出来た幼い友人を「たご」に巻き込むのは嫌だつたからだ。

それから数分後、お互の家に向かうため皐月は直江とわかれて一人きりとなつた。そのまま家へ向かつて歩いていくが、先ほどの視線は付いて来るままだつた。

（やつぱり私を追いかけてる。）

皐月はどうするべきか迷つた。後ろを振り向いて正体を確かめた所だが、それだとこちらが気付いた事がばれる。まあ見なくてもだいたい想像ではきたが。

（どうしたものかしら？）

「」で撒くのは容易い。何せここは住宅地、子供の体なら隠れられそうな場所はそれこそ無数にある。だが逆に相手の追跡が今後より執拗になるだらう。

（となれば、正面から話し合つかな？さつきの娘の正体も気になるし。）

そして彼女は決断すると、ルームミラーがある所で曲がつた。そしてそのまま電柱の陰に隠れ、ルームミラーをじつと見た。

案の定そこに映つたのは江戸川コナンと先ほどの少女の姿だつた。

コナンと哀は、友達とわかれて一人となつた少女が、突然角を曲がつたのを見ると、少し歩みを速めた。もちろん、走るなどということがしない。そんなことすれば、余計怪しまれる。

「気付かれたのかしら？」

「わかんねえ。ただ曲がつただけかも知れねえし。」

少女がこちらに気付いていたようには見えなかつた。だから意図的に曲がつたとは思え難かつた。

「とにかく見失つていないことを祈るだけだぜ。」

そして2人は角を曲がつた。そして、急停止することとなつた。何せ少女が正面からこちらを向いて待ち構えていたのだ。

「「え！？」」

もちろん2人とも驚いた。一方、皐月のほうは余裕の表情で2人を見て言った。

「なんで私を尾行していたのかしら？」

見かたによつてはかなり高圧的な物言いだつた。もつとも、その内心はかなり緊張していたのだが。

一方、尋ねられた2人はそうしたものかと思案していた。まさかいきなりストレートに「あなたは宮野明美ですか？」などと聞く勇気はなかつた。

そこでコナンはまづこいつ言った。

「どうして俺たちがつけているつてわかつたんですか？」

すると皐月のほうが困つた。こちらもまさか正直に言えるはずがない。

答えに窮してしまい、皐月は黙り込んだ。そのままこいつ着状態となる3人。

2分ほどして、その沈黙を破るよつて、勇気を出して哀が言つた。

「あの、あなたの名前は？」

すると、皐月のほうは素直に答えた。

「黒岩臥月よ。あなたは、灰原哀さんよね？」

臥月が確認する。

「ええ。つけてしまってごめんなさい。けど、あなたが私の知っている人にそつくりだつたから。」

「知つている人？」

臥月に聞かれて、一瞬哀は言おうか言わないか迷つたが、決心して言つ事にした。

「ええ。富野明美つていう人なんだけど。」

その瞬間、臥月が驚いた事は言つまでもない。妹そつくりで、自分の名前を知つている人間がアカの他人とは思えなかつた。そこで、彼女も尋ねる。

「あなたは、もしかして富野志保なの？」

「」の問いに、コナンも哀も驚いたのは言つまでもない。それと同時に、哀の心には嬉しさがこみ上げた。

「じゃあ、やつぱりあなたは富野明美・・・お姉ちゃんなの？」

「そつこつあなたは富野志保・・・志保なのね？」

お互い一度と会えないはずだつた。その姉妹が、数奇な運命を通して、再び出合つた瞬間だつた。

## 邂逅（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

## それぞれの事情

「お姉ちゃんが生きていたのは嬉しいけど、信じられないわ。死人を甦らせる技術があるなんて。」

皐月から事情を聞かされ、そんな哀の物言いに対して皐月が笑いながら言う。

「今の時代何が起きてもおかしくないわ。だって薬で大人が子供になっているんだもん。しかも2人も。」

痛烈な皮肉で跳ね返した皐月。まるでからかっている様だ。いや、実際からかっていた。

「う・・・

哀は予想外の反撃に言葉が詰まってしまった。

「けど本当にビックリですよ。だってあなたの死亡を確認したのは俺なんですから。」

黙つてしまつた哀に代わつてコナンが言つ。

今3人は皐月の家、つまりは黒岩家で紅茶を飲みながら話し合つていた。お互いの正体を確かめた後、とりあえずゆっくり話が出来るようにと、皐月が案内したのである。ちなみに彼女の保護者である黒岩夫妻はまだ仕事から帰つていないので不在である。

「コナン君・・・いえ工藤君と呼んだほうがいいかしら?あなたに

は最後の最後まで迷惑を掛けちゃったわね。本当にごめんなさい。」

「いいえ。むしろ謝るのは俺のほうです。俺がちゃんと止めていれば、あなたを死なせずに済みましたから。こいつからも、最初随分責められました。」

もう言つと、コナンは哀の方を見た。

「そう・・・妹もお世話になつちゃつた見たいね。本当にあなたには感謝しても足りないぐらいだわ、ありがとうございます。」

皐月はペコッと頭を垂れた。

「いや、そんな頭を下げてもうよつような事じゃありませんよ。俺だってこいつに助けてもらつたことがありますし。」

「うう。けど、なんで志保まで体が小さくなつているの?しかもコナン君と一緒にいるし。私が死んでいた3ヶ月の間に一体何があったのかしら?」

皐月が今一番気になつてることを聞いてみる。

「私は・・・お姉ちゃんがどうして殺されたのか組織に何度も聞いたの。けど、組織はどうしても教えてくれなかつた。だから、薬の研究を中止して対抗したの。けど、それは自分の首を締めただけだつた。私は組織に反抗したということで処分されそうになつた。けど、監禁された部屋で隠し持つていたAPT-X4869、工藤君も飲んだ薬を飲んだの。そしたら体が小さくなつてなんとか脱出出来た。そして、工藤君の所に逃げ込んだと言つわけ。で、今は彼と一緒に小学校1年生になつてゐるわ。」

「せう・・・それにしても、哀ね・・・普通だつたら人にそんな名前はつけないとおもつナビ。」

それが哀から名前を聞いた臥月の偽らざる感想だった。確かに哀しいといつ意味の漢字をつけたがる親などじょつと考えにくい。

「良いでしょ別に。どこの探偵さん見たいに、本のタイトルから適当につけた名前よりは数倍もマシだと思つわ。」

哀のそのひどこ言こようこ、どこの探偵さんはムシヒシながら言い返す。

「余計なお世話だ。」

「それで2人とも今はどつやつと暮らしているのよ・まさか私みたいにアカの他人の養子としてお世話になつて居るわけじゃないわよね?」

するとその質問に対してもコナンが答えた。

「今は阿笠博士つてこいつ、知り合この家で灰原と一緒にお世話になつていまや。」

一緒にといふ単語が気になつたが、臥月はそれをスルーしてさうに質問を続けた。

「組織からは追いかけられたりしていい?」

「ソニーが一番重要な所だ。例え子供の姿になつていても連中に哀や

皐月は顔を知られている可能性がある。

「今の所は。向こうも子供になつているとまだ気付いてはいないみたいで。ただ連中の情報もあんまり集まっていませんけど。」

その言葉に、皐月が仰天した。

「まさか、あなた組織の事を追つてはいるの？・・・呆れた。連中の恐ろしさはあなた自身わかつてはいるでしょ？それなのに・・・」

相手はいとも簡単に人を殺してしまつ謎の巨大組織である。そんな相手に世間で名が通つてはいるとはいえ、高校生が立ち向かうなんて皐月には自殺行為としか思えなかつた。

「お姉ちゃん、彼を止めても無駄よ。彼はやるといつたらひととんやるタイプよ。」

「確かに連中は強力だし恐ろしい相手です。けど、だからこそ潰さなきやいけないんです。連中をのさばらせておけば、新たな犠牲者が増えるだけです。確かにリスクは大きいけど、けど危険を恐れるようじややつらは倒せません。」

「ナンはす」く真剣な表情でそう言いきつた。それを見て、皐月は先ほどの哀のセリフが間違つていらない事を知つた。

「本気みたいね。だつたら私も陰ながら応援させてもらひつわ。けど、これだけは言わせて。絶対に無茶だけはしないでね。じゃないと、私の2の舞、もしかしたらそれよりも酷い事になるかも知れないわよ。」

それよりも酷い事とは、周りの人間を巻き込むところだ。ナンはそんなこと百も承知だった。

「わかつています。誰にも奴らの危険は及ばないようやります。」

「ナンはそう強く言い切った。その姿に、皐月は頬もしい物を感じた。

「そういえば、お姉ちゃんは組織の事をこの家の人に言つていよいよね？」

哀が話題を変えてきた。

「ええ。この家の人を私のことたごとに巻き込ませたくないから。お父さんもお母さん（黒岩夫妻）も私の過去については追及しなかつたし。」

黒岩夫妻は、彼女が銀行強盗の犯人であつた事を含めて、過去についてには聞いてこなかつた。唯一家族がいるかだけを確認しただけだつた。

皐月は知らなかつたが、これは夫妻が彼女を勝手に甦らせた自分たちに深く詐索する権利はないと考えたからだ。

「そう・・・あの、お姉ちゃん。私たちと一緒に暮らす事は出来ないのかしら？」

哀がいきなりそんなことを聞いてきた。

「灰原、いきなり何言い出すんだよ？」

普通に考えて、そんな事は無理である。今や明美は黒岩・臥月と言ふ人間で、家族もいるのだ。哀が彼女と一緒に暮らすには、哀が黒岩家に入るか、臥月が黒岩家に対しても離縁して阿笠家に転がり込むしかない。しかしどちらにしろそれでは組織の事を一人に話す必要がある。それは臥月がやりたくないことであった。

「「めんなさい。無理よね。けど、言いたかったの。」

「志保・・・」「めんなさい。けど私は今お世話になつてゐるこの家の人たちを命の危機にさらしたくないの。わかつてね。」

そういう臥月の表情は、哀しみを帯びていた。

「うん・・・」

哀は力なくそう答えた。

「本当にじめんなさい。けど、これだけは約束するわ。毎日必ずあなたに顔をみせるわ。それに、例え戸籍上はアカの他人になつても、私はあなたの姉よ。もし何かあつたら遠慮なく言つてちょうだい。」

そう言って微笑む彼女の表情は、妹を気遣う姉の物だった。その表情に、哀は救われる感じだがした。

「ありがとう・・・お姉ちゃん。」

## それぞれの事情（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

## 姉妹の会話（前書き）

この作品では、お気つきの方もいるかもしれません、原作とはある点で全く違つ設定を取つています。ですから原作どおりしかだめという方はお気を付けください。

「ナソンと哀が皐月と顔を会わせた数日後、3人の姿は阿笠邸にあつた。」の口皐月は、妹の面倒を見ている博士に挨拶しに来たのであつた。

「始めて、志保の姉である明美です。今は黒川皐月と言います。

」

「御丁寧にありがとうございます。阿笠博士じや。」

とりあえず2人とも型通りの挨拶をした。

「いやしかし、新一から聞いたときは驚いたが、まさか本当に生きていたとは。」

「信じられなくて当然です。私自身最初は信じられない思いをしましたから。」

皐月が苦笑しながら囁つ。

「しかし、その貴方を生き返らせた方とお会い出来ないのは残念ですね。」

博士が残念そうに言った。皐月を甦らせた父親（戸籍上）の城太郎は、この研究を現在は封印している。また皐月は組織のことを始めとして自分の過去は語っていない。だから、博士が会って話しあおつとしても面倒くさいことになるのは目に見えていた。

「まあそれはさておき、とにかく生きていた」とせめでたい事じや。  
今日はゆっくりしていって下さい。」

「ありがとうございます。」

黒田が博士に向かつて頭を下げた。

「さ、灰原。お茶とかは俺が持つてこつてやるから、先に黒田さん  
と一緒に上に行けよ。」

「コナンが哀にやう勧めた。上と申すのは哀の部屋だ。」

「えー? 私がするからいいわよ。」

「いいから、先に行けよ。」

そこで哀は気付いた。これがコナンからの気遣いだと。

「わかつたわ。じゃあお願ひね。」

「ああ。」

すると哀は微笑み、黒田の手を引っ張つた。

そして2人は仲良く2階へと上がつて行つた。

「あんなに嬉しそうな哀君は始めてみたのう。」

「ああ。嬉しくて当然だろうな。死んだと思っていた実のお姉さんが生きていたんだから。俺だつてほつとしてるんだ。」

「コナンが博士の言葉に同調して叫ぶ。

「しかし新一。あの娘を甦らせた人たちの行為についてだが、つまりは・・・そのなんだ・・・」

博士は先に続く言葉を考えられず、途中で口籠つてしまつた。

「わかつてゐるつて。死体損壊罪つてことだろ。それに死人を生き返らせる行為は倫理上の問題もあるだろ。」

「コナンは博士の言わんとしていることを察していた。

「なんじゃ、わかつとつたのか？」

「ああ。といふか俺も臯月さんから話を聞いた時から考えていたことなんだ。」

「で、新一はどう思うんじや？」

すると、コナンはバツの悪そつた顔をした。

「正直俺にもわからんねえ。確かに死体を傷つけたことや、死んだはずの人間を甦らせた事は問題だと思う。けど、灰原のあんな嬉しそうな顔を見ちまつとな。」

先ほど博士が言つたとおり、明美が生きているとわかつてからの哀の表情は心なしか明るい物となつていた。そして臯月と直接会う

と、今までにない笑顔をするよつになつた。

それを見ていると、コナンからは自然と彼女を生き返らせたことが罪という考えが薄れていつた。

「とにかく、もつじばらく考えてみるよ。わ、お茶の準備しなきやな。」

「やうじやな。」

2人はお茶の準備をするために、台所へと向かつた。

2階の奥の部屋では、久しぶりに姉妹が水入らずで話をしていた。

「本当に何年ぶりかしらね？こんな風に誰かの視線を気にすることなく、あなたと話をするなんて。」

「そうね。わざわざお膳立てしてくれた工藤君には感謝ね。」

この会話だけで、2人が如何に今まで縛られた生活を送つてきた

かわかるといつものだ。

哀の部屋は彼女の性格を反映してか、必要な物以外特に見当たらぬ。今2人はその最低限の調度品の一つであるベッドに腰掛けて話をしていた。

「だけど、あなたも小さくなっているなんてね。しかも工藤君と一緒にだなんて。まるで私達は何かの糸で繋がっているみたいね。」

「そうかもしれないわね。」

微笑みながら皐月に対して、哀も笑いながら答えた。

「それにしても、あなたどうして工藤君の所へ逃げ込もうと思つたの？何か理由でもあつたの？」

皐月が哀に聞く。先日黒岩家でした会話で、彼女は哀がコナンの所へと逃げ込み、今は一緒に暮らしているということは聞いた。だがその先の理由に付いては、あの後まもなく母親の京子が帰つてきたために聞けなかつた。だから皐月は今聞くことにした。

そして哀は最初数秒ほど黙り込んだが、すぐにそれについて語り始めた。

「私が組織に反抗して閉じ込められて、その後APT-X4869を使って脱出したのは前に話したわよね。あの時、私はどうしようか困つたわ。私には組織以外に行き場所なんかなかつたんだもん。」

哀の臉には、あの雨の日幼児化して特に行き先もなくただとにかく歩いた時の記憶が甦つてきた。

約3ヶ月前。富野明美がジンに射殺されてから3週間ほどしたころ、その妹である富野志保は雨の中途方に暮れていた。

APT-X4869の副作用で組織からの脱出には成功できたものの、彼女に行く宛などどこにもなかつた。家族は既に全員死んでいるし、親戚のことなど全く知らなかつた。例えいたところで、組織の息がかかっているのは確実だつた。そんな所へ行つたら最後、処刑されて解剖されること間違ひなしだつた。

薬を飲む直前は冷静に死のうとを考えていたのに、いや逃げ出すと生への執着心が心の中で生まれるから不思議であつた。

一体自分はどこへ行くべきなのか？誰を頼るべきなのか？志保は自問自答した。そして彼女の脳裏に1人の人間の名前が浮かび上がつた。

「それが工藤新一だったわけ。彼はAPT-Xを投与された人間で唯一死亡確認がなされていなかつたの。実験段階でAPT-Xの副作用として幼児化する可能性があるってわかつていたから、私はもしかしたらって思つたわ。それに組織が工藤君の家に派遣した調査チームの調査でも、子供用の服がごつそりなくなつていてるのがわかつていたから。もしかしたら工藤新一は幼児化して生きているかもしない。私はそれにかけてみたの。彼なら、私の事を理解してくれるかもしけない。助けてくれるかもしけないって。」

そこで一端彼女は言葉を区切つた。

「私は曖昧な記憶を頼りに米花町の工藤君の家まで歩いたわ。そしてようやく辿り着けた。私の記憶にあるのはそこまで。私はそこで氣絶したの、そして氣付いたら博士の家のベッドで寝かされていた。」

「そうだったの・・・あなたも随分と苦労したみたいね。」

皐月がそう言つと、哀が首を振つた。

「ううん。お姉ちゃんに比べたら私なんて・・・」

その時、部屋の扉がノックされた。

「灰原、皐月さん。入りますよ。」

「ナンの声がした。」

姉妹の会話（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

作中についたとおり、コナンと哀は阿笠邸と一緒に暮らしています。つまりこの作品では蘭という存在が元からないです。同様に毛利夫妻もいません。

新蘭派の方には申しわけありません。

今回は番外です。コナンと哀の出会いまで遡ります。

「ナンが子供の姿にされてから2ヶ月ほど経つたある日のこと。その日ナンは雨の中途中まで一緒にいた探偵団のメンバーと分かれ、1人家路へとついていた。家と言つても自分の家での1人暮らし出来ないために、今は隣の阿笠博士の家に厄介となつてゐるが。

もつとも、その阿笠博士の家は自分の家の隣であるから、自分の家の前を毎日通る事となる。この日もいつもどおり家の前に差し掛かつた。

だがそこでナンの目に妙な物が入つてきた。

「なんだ？」

家の前に何かの塊が落ちているのが見えた。雨と夕方で暗くなり始めていたので最初は一体何であるのかわからなかつた。

「ミミか何かと思つて彼が近づいてみると、人の頭のような物が見えた。

「まさか！？」

慌てて彼はその物体に駆け寄つた。そして、彼が見たのはそのままかだつた。倒れていたのは人だつた。厳密に言えば少女である。

「おい！しつかりしろ！…」

「ナンは抱き上げて声をかけるが、少女は全く反応しない。そし

てその体は雨に打たれ続けたせいか冷え切っていた。

「とにかく、阿笠博士の家まで運ばないと。」

「ナンは少女を背負おうとしたが、傘がじやまになつて上手く背負えない。しかたなく、自分もびしょ濡れになる覚悟で傘を置んで彼女を背負つた。

そして彼はそのまま阿笠邸へと入つた。もちろん、その姿に阿笠博士が仰天したのは言つまでもない。まあナンがびしょ濡れになりながら少女を背負つて帰つて来たら誰だつて驚くだらう。

「新一…どうしたんじや 一体…それにその娘は…？」

「わかんねえ。俺の家の前に倒れてたんだ。体が冷え切つてゐたいなんだ。急いで着替えさせて温かくしてやらないと。」

「それだつたら救急車を呼んだ方が良くないか！？」

普通だつたらそれが妥当だ。そもそもナンは携帯を持っているから彼女を発見した時には119番通報出来たはずだ。しかし、彼にはそれが出来ない理由があつた。

「いや、それは駄目だ！この娘の格好見てみろよ。」

「何…？」

「ナンに言わされて、博士はその少女の格好を見る。そして彼もすぐになんかに気付いた。目の前の少女はどうみてもナンと同年代にしか見えない。しかしその服は明らかに成人用の服であつ

た。もちろんだぶだぶである。その光景に博士は見覚えがあった。それは新一がコナンとして最初にあらわれた時のことだ。

「ま、まさか！？」

「ああ。」の娘も俺と同じかもしない。だから病院に連れて行くのはまずいと思うんだ。とにかく、体が冷え切つてから着替えさせて温めてやらないと。」

「わかった。それと新一、君も大分濡れている。そのままじゃ風邪をひくからこにはワシに任せて、シャワーを浴びて着替えなさい。」

傘をささなかつたために、コナンの方も少女に負けず劣らずビショビショだった。

「じゃあ博士、悪いけどこの娘のこと頼むぜ。」

そう言つて少女のことを博士に頼むと、コナンはシャワーを浴びに風呂場へと向かつた。冷えた体を温め、着替えて彼がリビングに戻つたのはそれから30分ほどしてからだつた。

「博士。」

「おお。戻つたか。」

「あの娘は？」

「ああ。見た限りはどこもケガはしていなかつたし、特に何かの症状も無かつた。熱もない。おそらくはただ気絶しているだけじゃと思うんだが、雨に長い時間打たれていたみたいだから肺炎の危険も

ある。一応できるだけ温かくして寝かせておいた。悪いが君のベッドを貸してもらひた。しかし、本当に新一の言つどおりなのかのう？」

博士はまだ疑念があるらしい。もひとも、口ナンセンスしてみても確信があるわけではない。あくまで推測である。

「さすがに断言は俺にも出来ねえよ。とにかく、あの娘が起きるまで待つしかないな。」

「わうじゅのひ。」

富野志保は夢を見ていた。その光景として、繰り返されるのは自分がガス室から抜け出してからの記憶だ。APT-X4869を飲んだ時の体が溶けるような熱さ、ダブダブの服を雨で濡らして街を彷徨う自分の姿。万が一の可能性を信じて工藤新一の家がある米花町へと向かったものの、雨に打たれて体力を消耗し、最後にはフラフラになり、ようやく工藤という表札を確認した所で力尽き気絶した。その一部始終がフラッシュバックとなって彼女の脳裏を駆け抜けた。

それが終わると決まって次のような考えが頭に浮かんだ。

(私、今度こそ本当にだめなのかしら?)

そればかりが浮かんでは消えていき、再び最初のシーンへと戻る。そんなことが延々と繰り返されると思い始めたとき、突如として何かが現れる。

(何ー?)

それまで冷たい感触しか感じなかつたのが、突如温かい何かに触れるのがわかつた。そしてその何かからはドクンドクンという心臓の鼓動が聞こえてくる。その音は力強く、まるで彼女の意識を再び現実へと引き戻そうとしているかのよつだつた。

(誰かに背負われているの?)

そう感じると、なぜか彼女は自然と心が落ち着いてくる。雨に打たれて体力を使い果たし、鉛の様に重くなつた体をその背中に預けても良いやうに感じられた。不思議と恐れとか警戒心のよつな物は感じられない。

(温かくて・・・力強い・・・あなたは一体だれ?)

その疑問が湧き始めると、それ以外の意識は全てどこかへと行つてしまつた。

(私を助けようとする・・・あなたは一体だれ?)

そして彼女の意識は現実へと引き戻された。

「ーー」

彼女は目を覚ました。その瞬間わかつたのは自分が寝かされてい

るところだった。

「…………」

体を起こそうとするが、疲れているせいか体が重い。それでもなんとか上半身を上げ、周りを見回した。

彼女の目に入ってきたのは見たこともない部屋の光景だった。ただその部屋が病院の病室でも、また組織の建物でもないことだけはわかった。

「一体…………」

状況がさっぱりわからない。とにかく今自分がどのような状況下に置かれているのか確認する必要があった。そこで、とりあえず起き上がりベッドから降りよじとした。

と、その時である。彼女の視線が床に向くと同時にそこで眠っている人間の姿が入ってきた。

「…………」

危うく声を上げそうになつたが、なんとか抑える事が出来た。そして彼女はそのままゆっくりとベッドから降り、その人物の顔を確認した。

「子供？」

そこには眠っていたのは、どうみても7、8歳ぐらいの少年だった。

御意見・御感想お待ちしています。

志保はその少年、コナンのことが気にはなつたが、とりあえず起  
じたなによつて動じた。しかし、間もなく。

ジリリリ・・・・

田覚まし時計が鳴り始めた。一度時刻は朝の7時を回つた所であ  
つた。志保は急いで止めるが、手遅れだつた。

「うーん・・・・

田覚ましの音で、コナンが田を覚ました。そしてそのまま開いた  
田が、志保の顔と鉢合わせした。

「「あ・・・・」

お互いなんと言つてよいのか、初めての会話で出た言葉がこれだ  
つた。コナンは急いで起き上がり、驚きで動けなくなつていた志保  
の前に立つた。

「ええと・・・どうか体の調子が悪い所はあるか?」

「えー?」

てつきつ名前でも聞かれるのかと思つて身構えただけに、そのコ  
ナンの質問は志保にとつて意外だつた。

「いや、お前雨の中俺に家の前に倒れていたから。助けた時には

大分冷えきつてたし。一応体温めて寝かせたけど、どこか後遺症でも残つてないかと思つて。」

「あなたが私を？」

「ああ。家の前に倒れていたから。」

「そりだつたの。取りあえず御礼を言わせてもらひうわ。あつがとう。」

「

「そこまでの会話で、大分空気が和んだ物となつた。」

「俺は江戸川コナン。よろしく。」

その名前を聞いて、志保は苦笑いした。

「「コナンへ・変な名前ね？」

「「ひるや二。」

「私は高野志保よ。」

と、そこで部屋の扉がノックされ、阿笠博士が入ってきた。

「おお、田を覚ましたのかね。良かった。取りあえず、2人とも降りてきなさい。朝食を先に済ませよ。し・・・コナン君は今日学校を休みにしてくがそれで良いかな？」

「ああ、頼む。そういうわけで、朝食にしようぜ。その後いろいろと聞きたいこともあるじ。」

3人は朝食を食べ終えると、リビングに座つて話しかけた。

「それで、富野志保さん。君は一体何者だ？ダブダブの服を着て俺の家の前に倒れていたなんて。ただの女の子じゃないよな？」

コナンは慎重に志保の尋問を進める。間違つても自分から工藤新一の名を出そとは考えなかつた。しかしこの会話では、もはや後がない志保の方が思い切りが良かつた。

「そうね。普通に考えればそうでしきうね。ただちょっと確認させて。あなたもしかして工藤新一？」

「いい！」

「きなりそこを突かれ、さすがのコナンも驚かざるえなかつた。

「どうして君はそう思つのかね？」

少しばかり狼狽しているコナンに代わつて博士が聞く。

「あなたの行動や喋り方が大人びている事。それに顔も少しばかり似てゐるから。まあほとんど感ね。」

自暴自棄といつ程ではないが、志保の言動はかなり大胆だつた。

「それでどうなのかしら？」

コナンとしては「こ」で正直に言つてしまつべきか、それとも志保の正体がわかるまでしらを切らうか迷つた。コナンはもう一度彼女

い。の顔を見てみると、その表情からは何かを隠しているようには見えない。

## コナンは決めた。

「ああ、そうだよ。」

「うやつぱりそういうのね。」

「お前本当に何者なんだ？まさか・・・」

「 そのまさかよ。私はある組織に入っていたわ。あなたの体を小さくした毒薬、APT-X 4869を飲ませたのもそうよ。 」

「ナンも博士も顔を見合させた。まさかとは考えていたが、今までほとんど掴めなかつた黒の組織の人間とこんな形で出会えばやはり驚いてしまう。

「その組織の人間がどうして俺の家の前で倒れていたんだ？」

「それは組織を裏切ったから。私はあなたと、そして私の体を小さくした毒薬APT-X4869の開発をしていたわ。」

「何だつて！」

「けど組織の仲間に姉が殺されたの。私は薬の開発を中止して対抗したけど、それは反逆行為と見なされたわ。だから処分されそうになつた。その時どうせ死ぬならと思って飲んだのが、A P T X 4 8

「うーむ、そんなことが実際に起こりえるとはな。それに証拠も残さずに相手を毒殺できる薬など、悪夢以外の何者でもないのう。それが今あなたと私が置かれている状況、つまり体の幼児化よ。」

「うーむ、そんなことが実際に起こりえるとはな。それに証拠も残さずに相手を毒殺できる薬など、悪夢以外の何者でもないのう。」

そう言って唸る博士。

「私があなたを頼ったのは、第一にあなたの名前は私にとつて鮮明に記憶の中に残っていたから。薬を投与された人間で、あなただけが死亡確認をされていなかつたから。そしてあなたは気付かなかつたようだけど、組織の調査班があなたの家を数回調べた時に、あなたの子供時代の服が消えていることがわかつたの。だからあなたが幼児化しているという仮説は容易に立てられたわ。」

「・・・」

「コナンは何も言わばずただ黙つて聞いていた。

「そして2つ目は、あなたなら、同じ幼児化した人間なら私の気持ちをわかってくれると思ったからよ。それから感謝して、組織のあなたに関するデータは死亡データに書き換えておいたから。最低でもあなたが追われる事は・・・」

だが志保はそれ以上言えなかつた。その瞬間志保に新一が掴みかかつたのである。

「うーーー！」

「おい新ーーー！」

「ふざけるなーーー何が感謝しろだーーーそれに気持ちをわかつてくれだつてーーーそんなこと出来るわけないだろーーーお前の毒薬のせいで何人死んだんだーー？俺だつてあの時は死ぬかと思ったんだーー！それなのに、表情変えずよくもぬけぬけとーー！」

「毒薬で多くの人を殺したのは済まないとと思うわ。けど仕方がなかつた。私はただ組織に言われて研究を続けていただけ、毒なんか作つているつもりはなかつたんだから。」

「なんだとーーー！」

つかみ掛かつて状態で、コナンはいつ志保を殴つても良い位興奮していた。博士がコナンを志保から引っ張がした。

「やめんか新ーーー君らしくもない。彼女を責めてもどうにかなるわけではない。」

「・・・・くそ。」

「それともう一つ謝らなきやいけないけど、解毒剤の開発は無理よ。薬を調合するにはもの凄いデータが必要なの。」

「だつたら・・・・」

「組織に潜入するのだつたらだめよ。私が逃げたといつ事で、組織は既に手を回しているはずだから。たとえデータが無事でも、あなたたちだけで行つた所で自殺行為よ。」

志保の言葉を聞いて、コナンは落胆したような、悔しそうな、いろいろな感情が入り混じった表情を浮かべるしかなかつた。

「ナン」と哀の出会い——口田は、非常に険悪な状況から始まったのであった。

御意見・御感想お待ちしています。

## 哀の想い

「あなたたちそんな風に出会つたんだ。」

皐月が「ナンと哀から話を聞いて少し驚いたよ」と云つ。

「そんな険悪な関係だつたのに、よく2人一緒に暮らせていろわね。」

話を聞く限りでは、2人が出会つた時の関係はまさに水と油であつたようだ。しかし、皐月が見る限りでは、今の2人の関係は良好である。

「まあ、それはお互いの利害が一致したつていうか。」

「ナンが苦笑しながら言つた。

「富野は他に行く場所がなかつたから。それに冷静に考えてみて、こいつも組織の被害者だと思ったから。」

そして哀も言つ。

「工藤君と博士には感謝してるわ。もしあの時助けてもらえなかつたら、私は今『』にはいなかつた。」

そう言つた哀の顔に、明美は組織にいたころの彼女にはない物を感じた。

「今あなたは本当に幸せみたいね。」

「えー？」

皐月の言つた言葉に、少しばかり困惑する哀。

その後も3人は色々な事を話し合つた。哀が現れた直後に起きた広田教授の事件、少年探偵団でキャンプに行つたら迷い込んだ城で危うくコナンが殺されかけた青の古城事件。

広田教授の事件については、皐月も哀しそうな顔をしたが、その後の事件を聞き終えると呆れ返るしかなかつた。

「あなたたち、何か悪い物にとり憑かれているんじゃないの？」

それが皐月の正直な感想だつた。まあ常識から見て、やたら事件にポンポン出でつコナンたちの日常はいつも見えて当たり前だつ。

「まあ工藤君にはそんな日常がお似合いだと私は思つわ。」

哀のその言葉に、コナンは表情を少し厳しくした。

「どういつ意味だー？」

「まあまあ、工藤君も落ち着いて。」

皐月が間に入つてコナンを宥める。いつも場合3人いると実に好都合である。

「まつたぐ。富野は本当に捻くれてるな。」

そうブツクサ文句を言いつつ、コナンは持ってきたポットからお茶を「ツップに注ごうとした。話していると喉が渴く。しかし、既にポットは空になっていた。

「お湯がなくなつたか。」

「じゃあ私が今度はいれて」よつかしら？」

先ほどは彼にお茶を入れさせたので、今度は自分がやつと想つて哀が立ち上がつた。しかし、それをコナンが止める。

「ああいいよ。俺が行つてくれる。じゃあ明美さん、俺お湯入れてくれるんで。」

「コナンはそつと一端部屋から出て行つた。

「彼結構気を遣つてくれていい見たいね。」

「コナンが部屋から出るのを見送つた臥月が言つた。しかし哀の表情はどうか呆れているような物になつた。

「まあ今だからよ。もし事件が起きたら、もつ他のことには目が入らなくなるわ。それに2人だけになつたらやたらホームズの話ばかりするのよ。彼真性のホームズオタクね。」

「コナンがいないことを良い事に、哀が彼に対する文句を言い始めた。

「そんなんだから青の古城の時になんて殺されかけるのよ。まああの時は私も不注意で危うい所まで追い込まれたから、お互い様と

言えばそつだつたけだ。」

そこで彼女は一端区切つた。

「けど、事件を解決する時は噂どおりそれなりに格好良いことは思つけどね。」

最後の言葉はどこか優しげな言葉を含んでこるよう、臥月には感じられた。

(・・・もしかしてこれは・・・)

そこで少し面白くなつた臥月は哀にこんな事を聞いてみた。

「ねえ志保・・・あなたもしかして・・・工藤君のことが好きななの?」

それを聞いた途端、哀は飲んでいたお茶を器皿に詰まらせた。

「ゲホゲホ・・・・お姉ちゃん、こせなり何を言つのー?」

さすがにお茶を詰まらせたことに懲りて思つたのか、明美は一端謝る。

「じめんじめん。」

「まったく。なんで私が工藤君のことを好きにならなきゃいけないのよーー。」

哀が臥月の考えを全力で否定しようとする。しかし、臥月にはや

の顔が赤じよつに感じられた。それで、やうなる搔かぶつをかける。

「だつて2ヶ月も同じ屋根の下で暮らしているんでしょ？たとえ体は子供でも一応心は17歳と18歳なんだから。それに最初は険悪だつたのがここまで良くなつたのだって、そこに愛があるからじゃないの？」

そういう墨円の顔はかなつにやせてくる。本当に樂しそうでこもうだ。

「そんなわけないじゃない！！私は彼を薬の実験対象としてしか見てないんだから。－！」

しかし、墨円はそれを簡単に信じよつとしない。

「ふ・・・どうだか。」

その顔は完全に哀を使って遊んでいた。

「お姉ちゃん、もしかしてこの状況を楽しんでいない？お姉ちゃんにこの気があるなんて思わなかつたわ。」

哀が顔を真っ赤にして文句を言つ。

「あら、これくらいのこと、やうらの大学生なら普通にするわよ。むしりそこまでひどく反論すると余計に怪しこと思つたぞ。」

「の場合年上で、しかも社会生活経験が長い墨円の方が論戦で有利だつた。

「ど、とにかく。私は工藤君のことはなんか何とも思っていないんだからーー。」

哀がダメ押しの言葉をついで、それに対する星月の反応はこう

と。

「ふ・・・」

鼻で笑つた。

「お姉ちゃん！ いい加減にしてよーー。」

哀はマジギレ寸前までヒートアップしていた。しかし、星月の方はやはりそんな妹を見て楽しんでこらめくだけだった。

「そんなに怒らなくてもいいじゃない。まあ私としては同じ女として、姉として応援してあげるから。それにしても志保も恋するようになつたのね。」

星月は完全に哀が「ナンの」と好きだとしていた。ついにそのように幅広の星月に、哀はついに堪忍袋の緒を切つた。

「だからーー。」

しかし。

「だからなんだよーー？」

「えー？」

皐月に対して哀がまくしたてようとも立ち上がった時、コナンがポットにお茶を入れて戻ってきた。

「えー？ 木藤君？ あ、今のなんでもないのよー本当に何でもないんだからねー！」

哀はじどりもどりになつて言つたが、はつきり言つてコナンには全く意味がわからない。

「あの 一体お前何が言いたいわけ？」

「えー？ いや・・・その・・・」

哀は真つ赤になつて黙り込んでしまつた。

その姿を見て、コナンはわけがわからずキョトンとし、皐月はただクスクスと笑うだけであつた。

## 哀の想い（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

黒岩皐月」と宮野明美が甦つてからちょうど1ヶ月が過ぎたころ、月日は9月の終わりを迎えた。皐月の学校生活は順調で、最初こそ少しばかり戸惑っていた子供としての生活もこのころには完全に慣れきっていた。

そんなある日、彼女は哀に会うために阿笠邸に来ていた。そこで、コナンたちとともにやつてきた少年探偵団の面々と出合った。

「あなた誰？」

最初にそう言つてきたのは歩美だつた。

「初めまして。私の名前は黒岩皐月。あなたたちと同じ帝丹小学校の3年生よ。名前は違つけどそこにはる灰原哀の姉よ。」

その言葉に、探偵団の面々は驚きを隠せなかつた。

「ええ！？」

# 「灰原の姉ちゃん！？」

「灰原さんにお姉さんがいたんですね！」

一方さらに驚いたのは哀である。そんな重要なことを初対面の人間にこうも簡単に言うとは考えてもいなかつたからだ。

「お、お姉ちゃん……！」

哀は彼女の隣に立つと小声で言つた。

「ちよつと、なんでそんなに簡単に言つたのよ。」

「何で？ 驄目だった？」

皇円は不思議そつた表情をした。

「だつてそういうじゃない。私たちの存在はあまり大っぴらに出来ない物なのよ。それにいつぞこから私たちの秘密が世間や組織にばれかわからぬのに。」

哀がそつ警戒するが、皇円のはうはいたつて平氣をつけだ。

「だつて相手は小学生でしょ？ だつたらそこまで神経質になることもないでしょ。むしろ無理に隠そつとすれば余計氣を引いちやうだけだと思つたび。」

確かに一理ある意見である。

「それはそつかもしれないけど・・・」

哀としてはまだ不満そつだ。そんなやり取りをする2人に、歩美が声をかける。

「ねえ、2人して何ひそかに喋つてるの？」

「「ひづる。なんでも。」」

何故か2人の返事がハモッた。

「 もう。 ねえ、 ええと黒沢さん、 それとも臥月さん、 どちらで呼ば  
ば良いかな？」

歩が臥月の呼び方に迷う。 それに對して臥月は笑いながら言つ。

「 臥月で良いわよ。 あなたのお名前は？」

「 古田歩美です。 ようじく、 臥月お姉さん。 」

歩は年上であるためか、 お姉さんと語尾につけた。

「 ようじくね歩美さん。 」

さりに他の2人も挨拶する。

「 僕、 小島元太。 」

「 源太君ね、 ようじく。 」

「 田舎光彦です。 ようじく、 臥月さん。 」

「 光彦君ね。 ようじく。 」

そして案の定と言おつか、 光彦がこんな質問をした。

「 それにしても、 どうして臥月さんは灰原さんと名字が違つんです  
か？」

すると哀は「そら見なさい！」と言いたげな表情をした。しかし  
皐月は焦りもせずに説明を始めた。

「実は私たちの両親は早いうちに死んじゃって、それぞれ別の親族  
に引き取られたの。だからこれまでちょくちょくしか会えなかつ  
たんだけど。お互いに米花町に来たから、今はこうして会つて  
いるわけ。」

なんともはや。上手い言い訳である。しかも表情を変えず笑顔の  
まま言つもんだから、皆簡単に騙された。

「そりなんだ。またお姉さんと会えるようになつてよかつたね哀ち  
やん。」

「う、うん。ありがと。」

歩美の言葉に、少々ぎこちなく言つ哀。だが、なんとかそれは氣  
付かれずに済んだ。

そして挨拶も済んだところで、歩美がこんな提案をしてきた。

「といひで皐月お姉さん。良かつたら少年探偵団に入らない？」

少年探偵団については皐月も「ナンや哀から話を聞いていた。

「少年探偵団、ああ哀とコナン君から話は聞いているわ。けど私で  
良いの？年上だけど。」

1年生のグループ（コナンと哀は本当は違つが）に1人だけ3年  
生が入つても大丈夫なものかと思い、皐月はそんな質問をした。

「大丈夫だぜ。団長である俺が言つんだからな。」

「そう言つのは元太である。すると、皐月がキョトンとした。

「あら？ 団長はあなたなの？ てっきり私はコナン君かと思っていたわ。」

すると源太がズッコケた。さらに追い討ちをかけるように歩美と光彦が言つた。

「まあ確かに元太君よりコナン君と灰原さんの方が頼りになるけどね。」

「お2人には逆立ちしても勝てはしませんからね。」

ズタボロに言つまくる2人。

「お、お前らな・・・」

しかし事実であるだけに反論のしようがない。

「まあ元太君が団長であることは別として、歩美は別に年上でも灰原さんのお姉さんなら良いと思つけど。」

「僕もです。別に少しくらい年上でも大丈夫だと思います。」

歩美と光彦も賛成に回つた。

「そう。そつちの2人はどうかしら？」

皐月は念のため「ナン」と哀にも確認を取つた。

「俺は別に皐月さんが良いなら構ないと想いますけど。」

「私は・・・あんまりお勧めできなけど、お姉ちゃんが別に良いなら構わないわ。」

「ナンの方はあつさり賛成したが、哀の方はあまりお勧めできないという気持ちが表面上の言葉だけでなく、語氣にも含まれていた。これは彼女がやたら事件に遭遇する少年探偵団に入る事を強く勧める気にはならなかつたからである。

「そうね・・・じゃあ入ろうかしら。ただ私は3年生だから授業時間も違うし、他の友達との付き合いもあるから、あなたたちの活動に必ず付き合える保障はないけど良いかしら?」

皐月が確認を取る。

「いいです。」

「僕も構いません。」

「俺もOKだぜ。」

歩美、光彦、元太がそれぞれ言つた。

「さう。それじゃあ改めてよろしく、少年探偵団のみなさん。」

しかし、皇月の少年探偵団への入団が正式に決まった。

「」の後、ゲームをしたりして遊んだ後、探偵団の3人は帰つた。そして皇月も帰ろうとしたが、そこで博士に止められた。

「皇月君、ちょっと待ちなさい。」

「何でじょうか？」

「皇月を引きとめ博士は、彼女に探偵団のバッジと時計型麻酔銃を渡した。」

「これは探偵団の皆に渡しているバッジじや。無線機と発信機になつていて、そしてこつちは腕時計型麻酔銃じや。コナン君と哀君にも渡したが、万が一組織の人間に見つからぬとも限らない。その時は「これで自分の身を守りなさい。」

渡されたバッジは共通の物だが、麻酔銃の方はベルトの部分が革製になつていて、文字盤もどちらかというと女性向けになつている。

「ありがとうございます。」

皇月はそれを受け取り早速腕に巻いた。そしてそれを哀に見せた。

「どう?似合つかしい?」

「ええ。とってもよく似合つてるわ。」

そして姉妹は笑顔でお互いを見合つた。

## 新しい仲間（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

## 夜の学校へ 上

皐月が博士より探偵団バッジと腕時計を貰つた日から数日した後の夕方、彼女の家に一本の電話が入つた。この時、家にいたのは彼女だけだったので、電話に出たのも必然的に彼女となつた。

「もしもし、黒岩ですけど。」

受話器を上げ一般的な言葉を言つと、帰ってきたのは聞き覚えのある声だった。

「皐月？ 私、直江。」

帝丹小学校に転入して友達になつた菊地直江からだつた。

「あら、どうしたのよ？」

「実はね、ちょっとお願いがあるんだけど。」

「何？」

「今から一緒に学校へ行ってくれないかな？ 実はノートを忘れちゃつたんだけど、一人で取りに行くのは少し怖くて。」

（なんだ、そんなことか・・・）

皐月はふとそんな事を思つたが、子供の姿になつてから始めて出来た友人、親友とも言える彼女からのお願いだし、それにちょうど暇だつた所だ。断る理由などない。

皐月が近くにある時計を見ると、6時半を少し回った所であった。今日は城太郎も京子も仕事が遅いから8時過ぎまで帰つてこないはずである。

「わかつたわ。じゃあいつもの場所で、10分後に会いましょう。

いつもの場所というのは、朝登校する時に使つてゐる待ち合わせ場所だ。

「本当！？ ありがとう皐月。じゃあお願ひね。10分後にいつもの場所でいいのね？」

「うん。それじゃあまた後で。」

会話を終えると皐月は受話器を置き、自分の部屋へと戻つた。

まさか必要となるとは思わなかつたが、一応念のため腕時計型麻酔銃を手首に巻き、バッジ型の無線機をポケットに入れる。

「よし。」

準備を終わらせると、彼女は家を出た。

朝登校する時の待ち合わせ場所で、彼女は直江と顔を会わせた。

「お待たせ。」

そこに着いたのは、直江の方が早かつた。

「皐月」「めんね、わざわざこんな時間に呼び出しちゃって。小母さんに怒られたりしなかった？」

「うん大丈夫。どうせ今日お母さんもお父さんも遅くて暇だつたら。や、早く学校へ行きましょう。」

「わづね。」

2人は帝丹小学校へ向かって歩き始めた。

小学校へ着くと、すでにあたりは真っ暗になつていた。先生も帰つてしまつたのか、職員室の灯りも既に消えていた。

「なんか夜の学校つて不気味ね。」

直江が闇に包まれた校舎を眺めながら言つた。

「だつたら入るのやめる？」

皐月が聞くと、直江は首を振つた。

「だめよ、忘れちゃつたのは宿題を出された算数のノートだもん。あれがないと先生に怒られちゃつわよ。」

「そつ。だつたらさつと終わらせて帰りましょう。本当はこんな時間に学校へ入る事はいけない事なんだから。」

「うん。」

2人はまるで忍者のように、そつと校舎のほうへと近づいていっ

た。

既に時間は7時になろうとしていた。教職員は全員帰宅しているため、もちろん校舎の入り口は全て既に施錠されている。

そこで、2人は仕方がないので警備員のいる宿直室から中へ入れてもらおうとした。皐月は根が眞面目なようなのか、ビルから空いている窓を探して忍び込むようなことはしなかった。

「すいませーん・・・」

2人が恐る恐る宿直室の扉を開けると、そこには誰もいなかつた。煌々と灯りが点き、机の上には酒瓶とつまみが散乱していた。

「いなみたいね・・・見回りにでも行つてゐるのかしり?」

「だつたら今之内に入っちゃいましょ。」

直江はそのままつとて、とつとと部屋を通り抜けて廊下へと出た。

「全く・・・」

皐月もその後を追つて廊下へと出た。

「うわー・・・外から見ても不気味だつたけど、中はもっと不気味ね。」

直江が真っ暗で静まりかえつた廊下を見ながら、先ほどと同じように言った。夜の学校は、昼間生徒たちの声で満ち溢れた光景とは全く違う空間であるように2人には見えた。

「そうね。で、行きましょ。」

「うん・・・けど、真っ暗でよくわからないわね。」

「だつたら、片田をしばらく閉じてなさい。やうすれば田が慣れるはずよ。」

「うん・・・」

直江は片田をしばらく閉じた。

「どう?」

数秒後皋月に言われて、彼女は田を開いた。

「あ、やつきよつは見えるよつになつたわ。」

「じゃあ行きましょ。」

「うん。」

2人は教室へ向かって歩き出した。校舎内に、他の侵入者がいるとも知らずに。

暗い中段を踏み外さないよつに階段を上り、外から入る明かりを頼りに廊下を歩くことおよそ3分。2人は自分たちが使っている教室についた。

直江は自分の机の所へと行き、中をまわぐつた。

「ええと・・・あった！」

直江がお皿並のノートを見つけた。彼女はそれを抱きかかえると、教室の入り口で待っている皐月の所へと戻った。

「見つけたわ。」

「よかつたわね。じゃあ帰りましょう。」

「うん。」

2人は教室の扉を閉めて、今来た道を戻り始めた。

事件が起きたのは2人が階段のところまで戻った時であった。静まりかえった校舎内に、突然、ドン！という何かをぶつけたような音と、それに混じるかのように「うわーー」という男性の声がかすかに聞こえてきた。

「な、何！？」

直江が突然発生した不気味な声に、怯える。

一方、皐月の方も敏感に反応した。

「何かをぶつけるような音と男の人の悲鳴みたいだった・・・まさか！」

「」の時、彼女の脳裏にはまさか何らかの事件が発生したなどといふことは予想できなかつた。ただし、何らかの異常事態が発生した

「ことだけは確かだつた。

皐月が最初に考えたのは、見回り中の警備員が何かに頭をぶつけたか、階段で落下したかであつた。

「行つてみましょ。音は上のほうからしたわ。」

現在2人がいるのは2階だ。校舎は3階建てだから、皐月は3階へと上がろうとする。

「ええ！ 惧いよそんなの！！」

直江は怖気づいていた。

「けどもし警備員さんがケガしていたら大変だわ。」

「だつたら、一端やつきの部屋に戻つてから誰か呼びましょ。」

「それじゃあ遅いわ。」

しかし直江のほうはすっかり恐怖心が芽生えてしまつたようだ。そこで、皐月は少しでもそれを和らげようと、腕時計のライトを点けた。

「うわー。」

こきなり点けたので、直江がビックリした。

「あ、ごめん。」

「気にしないで。それよりも一体それ何？」

「これは時計の中にライトが仕込まれているの。懐中電灯ほどじゃないけど、灯りがないよりはまし。ただ電池がいつまで持つかわからぬけど。とりあえず、これで少しは安心できるでしょう？」

「うん。」

「じゃあ行きましょう。」

2人は、小さな灯りを頼りに階段を上りはじめた。

御意見・御感想お待ちしています。

## 夜の学校へ 中

皐月と直江の2人が階段を昇り切つて3階へと着いた。3階も2階と同じく既に灯りはなく真つ暗である。わずかに、非常口を示す表示板の灯りだけが緑色の弱い光を放つている。

別にこういう場面に慣れているということはないが、元々大人である皐月は冷静であった。しかし、彼女の後ろにつく直江は10歳の少女である。そのせいか、かなり怖々した様子だった。

そんな彼女の様子に気付いた皐月が声を掛ける。

「大丈夫？」

「う、うん。なんとか。」

「そう、頑張つて。」

2人はそのまま歩き、一番近い教室の扉の所まで辿り着く。真つ暗とは言え、都心の中にある学校だけに、窓からそれなりに光が入つてきている。だから田さえ慣れてしまえばドアの取手を見つけるのも簡単だった。

皐月は取手に手をかけて、そつと扉を開けた。2人はそのまま教室の中へと入る。

教室の中も灯りは点いていないから当然暗かつた。そこで直江が灯りをつけようとした。それを慌てて皐月が止めさせる。

「電気は点けないで…」

「えーなんで…?」

「とにかく点けないで…お願い…」

皐月には特に何か理由があつたわけではなかつた。ただ漠然と、電気は点けていけないという気持ちが心を支配していたのだ。

「うん、わかつた。」

皐月が強い口調で言つたので、直江は電気を点けるのを止めた。

「あつがとつ・・・・・」の部屋には何もなあつね。」

皐月が持つっていたライトで部屋の中を見てみたが、特に異常ひじい物は見られなかつた。

「いじも何もないよ。」

皐月と少しほなれて部屋の中を見て回つた直江が言つ。べつやうじの部屋には何もなあつだつた。

「そり、じゃあ次の部屋へ行きましょ。」

2人は隣の教室へと移動した。そして先ほどと同様に暗闇の中での何か異常がないかを見て回つた。そして、

「あら・・・・変ね・・・・」

皐月がまずそれに気付いた。

「どうしたの？」

「テレビがなくなっているわ。」

皐月が本来教室に備えられたテレビ用の台をライターで墨りす。確かに、そこにあるはずのテレビがなかった。

「誰か先生が持つてたんじゃないの？」

直江が言つ。しかし、皐月はそれをすぐに否定した。

「それにしてはおかしいわ。だつて固定用のバンドが切られてるもん。」

最近の小学校や中学校に備えられているテレビには、地震対策としてテレビなど揺れで動いてしまうかもしれない物をバンドなどで固定する場合がある。帝丹小学校でもそうであった。その固定用のバンドが切られて、固定されているはずのテレビがなくなっていた。

「え、じゃあ？」

「誰かが盗んだ・・・そう考えた方が妥当ね。」

「それじゃあ早く誰かに報せないとー。」

「そうね。けど、まださつきの悲鳴の原因を突き止めていないわ。それに本当に泥棒が入ったかもわからないし。」

「そうね。けど、まださつきの悲鳴の原因を突き止めていないわ。それに本当に泥棒が入ったかもわからないし。」

皐月はそう言いながら振り返った。そして、信じられない光景を目の当たりにした。

「あ・・・」

「どうしたの？」

直江も釣られて振り返った。そして。

「な、何あれ？」

それは教室の後ろにあった。そして、皐月にはどう見ても人が倒れているようにしか見えなかつた。

皐月は急いでその人間に駆け寄つた。

倒れていたのは、60大前後に見える男性だつた。

「大丈夫ですか？」

皐月が声を掛けて、体を揺さぶつてみる。その後ろから直江が心配そうに言つた。

「死んでるの？」

だが、男性は微かに、「うう・・・」と声を漏らした。

「大丈夫、息も脈もちゃんとあるわ。一時的に気絶しているだけみたい。」

卷之三

直江が安堵の息をつく。

「どうやらやつぱり誰かが校舎に侵入しているみたいね。」

「ええ!? それじゃあやはいる。早く誰かに報せないと!」

「落ち着いて！あまり声を立てないで、相手がまだ近くに潜んでいるかもしれないわ。とにかく、連絡をとるわよ。」

「主の御心」

生憎と2人とも携帯電話をこの時、持つていなかつた。そうなると、電話のある1階の守衛室か職員室まで降りなければならぬ。

だが、皐月には博士から貰つた探偵団バッジがあつた。

彼女はポケットに忍ばせていたバッジを出すと、アンテナを伸ばした。

それ何で

当然、直江が不思議そうに聞いてきた。

「これは無線機になつてゐるバッジなの。これで外と連絡を取れる  
わ。」

「なら早く取つてよ。」

「ええ。」

皐月は電波の出力を最大にした。

「ひづら皐月、ひづら皐月。誰か聞こえますか？」

返答が来ないか数秒待つて確認するが、返答は来なかつた。そこでもう一度同じ言葉を繰り返してみる。

「ひづら皐月、ひづら皐月。誰か聞こえますか？」

そしてもう1回同様に返答を10秒ほど待つてみるが、やはり返答は来ない。ダメかと思い、もう一度皐月が繰りえそうとした時、バッジから声が返ってきた。

「ひづらコナンです。明美さん、どうしました？」

応答してきたのは、都合の良い事にコナンだつた。連絡が繋がつた事で、皐月と直江の表情が明るくなる。

「コナン君、実は今帝丹小学校にいるんだけど、3階の教室で警備員のおじさんが何者かに殴られて気絶しているのよ。」

「何だつてー？」

「それと、教室のテレビがフックを切斷されて盗まれていたわ。多分強盗が入つたんだと思つわ、直ぐに助けを呼んでー！」

「わかりました。警察と救急に連絡して、俺も直ぐに行きます。明美さんも充分気をつけてください。」

「わかつたわ。」

そして2人は会話を終えた。

「これで助けが来てくれるわ。ひとまず安心ね。」

皐月が笑顔で言う。

「良かった・・・けど、皐月ちゃん何時の間にあのコナン君と知り合いになつたの?それに明美って誰の事?」

会話中は緊張からか聞いてこなかつたが、冷静になつたといひで彼女が聞いてきた。

「え!?いや、そのね・・・」

まさか事実を喋るわけにはいがず、かといつて言い訳が直ぐに思いつかず皐月は困つてしまつた。

その時である。

「今声がしなかつたか?」

「え、俺には何にも聞こえませんでしたよ。」

複数の男の声が2人の耳に入つてきた。

御意見・御感想お待ちしています。

「 まざい……隠れて……」

皐月は直恵に教壇の下を指差して言った。2人は素早く教壇の下の空きスペースに入つた。

その時、教室の後ろの扉が開いた。さらに教室内に明かりが差し込んだ。

「 「 ー. ? 」 」

2人は驚いたが、文字通り息を殺して様子を窺う。

「 誰かいたか？」

「 いいえ、さつき殴り倒した爺が寝転がっているだけです。」

2人の若い男の声が聞こえてきた。幸いなことに2人には気づかなかつたらしい。

「 そ、うか。しかし、こんなベロンベロンに酔つた爺に警備員をやらせるなんて、この学校は一体何をやつてるんだか。入つた俺が言うのもなんだが、これじゃあ犯罪の標的にしていくださいって言つてるようなもんだ。」

男のうちの1人が呆れたように言つた。

「 まあ、そのおかげでこちらは仕事がやりやすいわけなんですけど

ね。」

「それもそうだ。さ、異常が無いならさつと仕事を終えて逃げるぞ。」

2人は部屋から出て行くようだ。そのため皐月も直恵も安堵の息をついた。

しかし、油断大敵という言葉がある。この時彼女らはその言葉どおりのことをしてしまった。2人が安心して体の力を抜いた瞬間、教壇の足の部分に直恵の肘が当たった。

ガタン！！

「「！！」

「誰だ！？おい、誰かやつぱりいるみたいだぞ！」

2人がそれこそ心臓が飛び上がるんばかりに驚いたのと、男の1人が気づいたのとほぼ同時だった。そして次の瞬間には教壇に懐中電灯の光が当てられた。さらに、男が机の間を縫つて2の方へ走つてくるのもわかった。

皐月は瞬間に叫んだ。

「直恵、走つて！！」

直恵を先に逃がす形で、2人は教室の前の扉に向かつて走り始めた。もちろん、その姿は懐中電灯の明りに照らし出された。

「子供！？」

男の方は、こんな時間に子供が学校にいることに驚いたらしい。だが、すぐに2人を追いかけてきた。

「待て！！」

2人は必死の想いで走った。しかし相手は大人の男。しかも2人。体力の差は歴然としていた。

「捕まえた！！」

「！？」

「皐月！」

後ろを走っていた皐月の肩に男の手が伸びた。そして振りほどくことも出来ぬまま、皐月は捕まってしまった。

「直恵、逃げて！！私に構わぬ逃げて！！」

なんとか友人だけでも逃がそうと叫んだ皐月であったが、相手が2人組みであるのが不味かつた。程なくして直恵も捕まってしまった。

3分後。2人は床に座らせられ、両手足を縛られて完全に動きを封じられていた。

「こんな時間に女の子が一体何をしていたのかな？」

もう1人より年上と思われる男が皐月の顔を覗き込みながら言つた。もつとも、皐月は犯罪者の質問に答えるようなことはせず、逆に強い口調で質問した。

「あなたたちこそ学校で何やつてるのよー!?まあ、聞かなくて大いたいわかるけど……どうせ、学校荒らしでしょ?」

夜の学校に入る不審者のことなど大体そのような物だ。

「その通りだお嬢ちゃん。だがその頭のよさが命取りになるぞ。それに俺たちの顔を見ちまつたしな。」

男がそう言つても、皐月は全く同時なかつた。しかし、隣に座つている直恵の方はがちがちに震えていた。男の言葉から何かされることをしつかり感じ取つたからだ。

「そ、皐月……」

恐怖で震えながら言つ直恵。

「落ち着いて。」

皐月は自分でも呆れるほどに冷静でいられた。かつて黒の組織で働き、一度死んだことが彼女をそうさせているのかもしれない。

「嬢ちゃんなかなか肝が座つてゐるな。まあ安心しろ、今はこいつの仕事があるからな。お前たちをどうするかはその後だ。おいー!といえず仕事を先に済ませるぞ!」

「はいー!」

すると、男たちは2人を置いて行ってしまった。

「どうしよう、私たち殺されちゃうのかな？」

直恵が随分と物騒なことを言つたが、現実にその可能性を皐月は否定することが出来ない。もしかしたらそれ以上にやばい事になるかもしれない。

だが、皐月がそこまで不安を持つことはなかつた。

「大丈夫よ。あいつらはすぐに後悔することになるわ。」

「えー？」

皐月が不敵な笑みを浮かべて言つてから2分後。突然廊下の向こうが騒がしくなつたかと思うと、「うわーーー」、「ぐおーーー」という先ほどの男たちの声が響いてきた。

「何かしら？」

直恵が不思議そうに言つた。

「多分助けが来たのよ。」

「えー？」

それから間もなくして、廊下の明りが一斉に点き、2人よりも明らかに年下と思われる人影が近づいてきた。

「明美さん……」

「お姉ちゃん……」

案の定といつべきか、やつて来たのは「ナン」と哀だつた。

「ナンは直恵の縄を解き、哀は皐月の縄を解いた。

「大丈夫、おね……皐月さん？」

先ほどは直恵がいることに気がついていなかつたが、それがわかつたために哀は彼女のことを名前で、他人のよつに呼んだ。

「ええ。あなたならすぐにしてくれるつて思つたから。あいつらは？それと警備員におじさんが倒れてるんだけど。」

その質問に「ナン」が答えた。

「全員眠りました。それとすぐに警察と救急車が来ますから安心を。」

彼の言葉どおり、間もなくパトカーと救急車のサイレン音が聞こえてきた。

御意見・御感想お待ちしています。

皐月と直江が夜の学校で遭遇した事件は、コナンと哀が来たことであっけなく終わった。2人は時計型麻酔銃とキック力増強シュー  
ズを使って、それこそあつといつ間に学校荒らしの2人組を倒してしまったからだ。

その後、コナンたちの通報を受けてやつてきた警察によつて2人組は逮捕され、また殴られて氣絶していた警備員も救急車で病院に運ばれていった。

皐月と直江の2人はコナンたちに助け出された後、すぐにやつてきた警察官によつて保護され、そのまま事情聴取のためにコナンたちとともに米花署へと移動させられた。

小学生の直江は警察に連れて行かれることに怖々とした感じだったが、皐月のほうは学校荒らしに捕まつた時と同様落ち着いていた。警察署での事情聴取は、既に午後9時を回つていたこともあって、詳しいことは後田としたために、簡単で短いものとなつた。皐月と直江に対する事情聴取はほんの10分ほどで終わつた。

事情聴取が終わつて皐月が廊下に出ると、ちょうどそこでは連絡を受けて皐月を迎えていた黒岩夫妻と、コナンたちの保護者である阿笠博士が話し合つていた。その側にはコナンと哀が立つていた。2人も皐月たちと同じように話を聞かれたはずだが、より短時間で終わつたらしい。

すると、哀が皐月の方へやつて來た。

「お姉ちやーさん、無事で本当に良かった。」

哀は姉の無事を再確認して安堵の息をつこうとするが、それよりも  
臥月の方は大いに内心驚いてしまった。なぜなら直江や黒岩夫妻の  
いる前で自分のことを姉と明確に言つたからだ。

「ちよ、ちよひとつ……哀。そんなこと言つたら。」

臥月の心配どおり、すぐに直恵が会話に介入してきた。

「ねえ臥月、学校で聞いたときから気になっていたけど、一体どう  
いふことなの? どうしてこの娘があなたのこと姉つて言つたの?」

「ええと、こればね……」

臥月が返答に困つてこると、哀が代わりに答えた。

「はじめまして、菊池直江さん。私は灰原哀、ここにいる黒岩臥月  
の妹です。」

その発言に、臥月はそれこそ心臓が飛び出る思いだった。

(ちよひと志保、それは秘密にあることじやーーー)

「えー? カジ苗字が違うし、住んでいる所も違うでしょ?」

直江が小学生としては常識的な質問をした。

「実は私たち、親が離婚して別々に育てられたんです。けど両親は

早くに死んでしまって、その後それぞれ別々の家族に引き取られたんです。そして米花町で再開したんです。」

皐月はまたも驚いてしまった。確かに話の辻褄はあつていい。しかし、こんなことを聞いたのは初めてである。

「やうだつたんだ。でも皐月はそんなこと一度も話してくれなかつたよ。」

「お姉ちゃんは昔のことを話すのが嫌いなんです。やうよね、お姉ちゃん？」

哀は皐月の方を向いてウインクした。その意味を、皐月はすぐに理解した。つまり話を合わせることだ。

だから、皐月は哀の会話に相槌を打つ形の言葉を言つた。

「そうなの。」めんね、黙つて。」

「ううん、誰でも話したくない」とぐりこあるから、それにそんなこと誰だつて話したがらないよ。わざわざ話してくれてありがとう。」

「

皐月は直江の言葉にひとまず安心した。彼女がとりあえず哀の言葉に納得してくれたからだ。これがとことん追求するような人間だったら、またややこしいことになつていただろ。」

それから間もなくして、直江は迎えに来た両親と一緒に帰つていった。そこでよつやく皐月は哀に直接声をかけることが出来た。

「し……哀。さつきは助けてくれてありがとう。だけど今の話は一体どうことじよ?この間会った時は、あんなこと言つなんて一言も言わなかつたじやない。」

「「めんねお姉ちゃん。実はね、この話のことを言つたのは江戸川君なのよ。」

「コナン君が?」

意外な所でコナンの名前が出てきたことに、皐月は怪訝な表情をした。

「さう。彼、学校でお姉ちゃんを私が助けたときこ、お姉ちゃんつて口を滑らせたことをちゃんと聞いていたのよ。それで多分あの直惠つて娘がお姉ちゃんに聞いただすだろうからって、さつきした話を考えたのよ。」

「あの一瞬のこととそこまで!……さすがに世間にその名を知らしめた高校生探偵、伊達じやないわね。」

皐月は改めて、コナンこと工藤新一の実力を思い知らされた形となつた。と、そこで皐月はあることが気になつた。

「けど今の話、お母さんたちにどう説明したら良いこのよ。」

現在、皐月は自分の過去についてほとんど話してはない。しかしながら、黒岩夫妻は皐月の元の姿、すなわち宮野明美が成人していとということは知つていて、だから哀と姉妹であるといつ説明にはどうしても無理が生じてしまつ。

「それなんだけど。私と口ナン君のことを話すことにしたの。」

哀のその言葉に、皐月は凍りつくような想いとなつた。すなわちそれは組織のことを話すこと等しい。だから皐月がもつとも恐れたこと、2人を巻き込むことになる。

「ちょ、ちょっと哀ーそれはー?」

「落ち着いて。もちろん私だって不必要に他人を巻き込む気はさらさらないわ。だからもちろん組織のことはあの人たちには言わないわ。」

その言葉に、少しばかり安心する皐月。だが同時に疑問も湧く。

「せう。けど、じゃああなたたちのことはなぜいつ説明するのよ?」

「安心して、それも考へてあるから。私は本當はある製薬会社で働いていた人間で、実験中の風邪薬の副作用でこうなりましたって。工藤君についてもほぼ同じような内容で通す気よ。」

「そんな胡散臭い話で大丈夫なわけ?」

皐月が心配して言つたが、哀の方はいたつて普通の表情のまま言つた。

「死人を生き返らせることが出来る」時世よ、何が起きても不思議じゃないでしょ?」

皮肉とも言えるその言葉に、皐月はキョトンとしてしまつた。

「それに、私たちはずれとても危険なことをしているんだから、阿笠博士もあの人たちも、お互いそれ以上聞くべきではないことぐらいわきまえているわ。」

哀の言葉に皐月は納得した。実際どちらもヤバイことをしていることには違いない。だったら知る必要のない危険なことを詮索するようなマネはしないのが常識といつものだ。

「けど、とにかくお姉ちゃんが無事でよかつた。もし、またお姉ちゃんに何かあつたら……。」

そこで哀は口ごもってしまった。その表情は先ほどまで冷静に話をしていた時の物とは違つて、ただ姉を心配する妹のものに変わつていた。

「哀……めんね心配させちゃつて。」

皐月は静かに哀を抱きしめた。

この後、2人はそれぞれの保護者とともに家へ帰ることになる。この事件が2つの家族に与えた影響というのはそれなりにあったのだが、それはまた次回。

## 進展（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

小説家になろう～秘密基地～というサイトのイラストコーナーで、南さんという方がこのシリーズの挿絵を描いてくださっています。

## 回想 怪盗キッドとの初手合せ

学校荒らしの事件から数日後の日曜日、皐月の姿は阿笠邸にあった。この日は両親とも用があつて出かけて暇であつたため、彼女は妹のところに来ていた。

最近阿笠邸にやつてきて彼女が哀とすることと聞えば、探偵団のメンバーでもいかぎりお喋りぐらこのものだった。しかし、かつて四六時中組織に見張られていた彼らにとって、誰の目も気にせずお喋りすることは何よりも楽しいことだった。コナンも2人のこと気に遣つて自分の部屋に入つてくれる。

そんな彼らの話しあひ内容と並んで、たわいもないことばかりである。学校でのこと、家でのことなどであるが、皐月が哀に聞く場合には組織を抜けてから自分と会つまでの間に何をしていたかとこゝの質問が加わる。

哀はその質問に対しても、ちゃんと答えていた。ただ答えているうちに、皐月の顔がだんだんニンマリしていくのがわかつた。

不審に思つて哀は皐月に聞いてみた。

「お姉ちゃん、なんでそんな顔するの?」

すると、皐月は楽しそうに言った。

「だつて哀つたら、コナン君のことを喜びに聞かずじやんかうから。」

「えー？」

全く自覚がなかつただけに、哀はビックリし、顔を少し赤くしてしまつた。

「お姉ちゃん、私をからかつていいでしょ！？」

「別に。」

と皐月は言つたが、実際のところ哀をからかっていた。彼女も女の子であるから恋愛に興味があつて当然だつた。特に哀は組織にいたころ、ひたすら薬の研究ばかりしていたから、恋愛とは無縁であつた。そんな彼女が一体どんな恋をするのか、姉として女として皐月は大いに興味があつた。

また皐月は、哀がコナンを好き、もしくは無意識のうちに好きになつてゐることに気づいていた。そしてそれは皐月にとつては嬉しく、面白いことだった。だから先ほどのように哀をからかつたのである。

ちなみに、2人で会話すれば必ず2、3回はこんな光景が見られる。

「いつも言つてゐるけど、別に私は江戸川君のことなんか、薬の実験対象以外にはなんとも思つてないわ。」

哀がきつぱりとそつぱつと、皐月は相變わらはず一や一やしたまま言つた。

「ふーん……所謂シンナーってやつね。」

「お姉ちゃん……」

恋の話題になると、いよいよ遊ばれる娘であった。ちなみに、哀が「だったらお姉ちゃんはどうなのよ?」と円並みな質問を返さないのはある意味幸運であった。もし聞けば、臥月が表情を暗くするのを確実だったからだ。

まあとにかく、そんな感じで姉妹は日曜日を楽しく過ごしていた。しかしそんな時間は、突然2階の部屋から走って降りてきたコナンによつて終わりを告げた。

「どうしたのコナン君? そんなに慌てて?」

コナンが慌てて降りてきたために、臥月が声を掛けた。

「あ、臥月さん。今部屋でインターネットでニュースを見ていたんですけど、怪盗キッドが警視庁に予告状を送りつけってきたらしいんですよ。だからちょっと家へ資料を見に行こうと思つて。」

すると哀が立ち上がつた。

「手伝つた方が良いかしら?」

「大丈夫、今回の予告状はそんなに難しくなさそうだから。灰原は臥月さんとゆづつしていくよ。それじゃあ。」

やつ言つてコナンは出て行つた。その様子を、哀は少しばかり寂しそうに見ていた。

「コナン君随分やる気十分つて感じだつたわね。さすがに新聞でキッドキラーなんて呼ばれるだけあるわね。・・・けどなんか嬉しそうにも見えたわね？」

「それはそうよ。怪盗キッドは今時珍しい予告状を暗号で送りつけてくるのよ。彼が興味を惹かれないはずがないわ。それに江戸川君にとつて、怪盗キッドは永遠のライバルだから。」

心なしか哀の声も嬉しそうだつた。

「一体どひこひ」とつ。

皐月が尋ねる。

「それはね・・・・」

哀は数ヶ月前、自分が体験した怪盗キッドに関する事件について話し始めた。

哀が阿笠邸にやつてきてからしばらくたつた頃、コナンの父親である工藤優作が一時帰国した。そのことに、コナンは驚いた。いきなりのことであり、さうしてこのところ海外にずっといた父親が帰つてきたからである。

もちろんコナンは、父親の帰国の理由を問いただした。

「父さん、なんで連絡もくれずにつきなり帰つてきたんだよ。」

息子が怪訝な表情をする中、当の本人は笑いながら答えた。

「いや悪い。実はある人に呼ばれてね。」

「ある人?」

「鈴木財閥会長の鈴木史郎氏だよ。」

「コナンにはその名前は大いに聞き覚えがあった。しかし、傍で聞いていた哀にはもちろんわかるはずがなかつた。」

「誰よ?」

哀が「コナンに聞く。

「園子つていう俺の高校でのクラスメイトの父親だよ。・・・それで、なんで父さんが園子の父親に呼ばれることになつたのさ?」

「実は怪盗から送りつけられた予告状の暗号を解くよつて頼まれてね。」

「予告状?」

「ああ、怪盗1412号からのね。ちなみにこれがその予告状だ。」

優作が懐から一枚の紙を出し、「コナンに差し出した。彼は受け取ると早速それを読む。また哀も覗き込んだ。しかしながら、一目見ただけでは一体何を言つているのか彼にも彼女にも全くわからなかつた。

ちなみに予告状の内容は「ミック1-6巻と同じ。

「何これ？最初のエイプリル・フールは4月1日ってわかるけど、他の言葉は何を言っているかさっぱりわからないわね。」

「まったく、今時こんな手の込んだ予告状を差し出す泥棒って一体どんなやつだよ？」「…

すると、優作が呆れたよつた。

「おやおや、事件大好きのわが息子にしては随分と勉強不足じやなうだな。」「

「俺は泥棒なんて興味ないよ。けど、確かにこの暗号はおもしろそうだな。」「ナ・ンの田は、事件を解く時の真剣な物になっていた。それを横目に見ながら、哀が優作に尋ねた。

「あの工藤君のお父さん。あなたはあの暗号が解けたんですか？」

「優作でいいですよ。ええ、一応は。」

後半は小声で哀だけに聞こえた。彼は言った。

「だったら彼に教えないんですか？」

哀が小声で質問すると、優作は小声のまま答えた。

「いや、あいつには自分自身で解かせたい。むしろ解かなければいけないと私は考えているので。」

「えー？」

その言葉の意味をはが理解することが出来なかつた。彼女が理解するにはまだまだ先のことである。

一方、一人解き始めたコナンは5分ほど必死に考えていたが、結局この時は解けなかつた。

「だめだ。全然わからんねえ。・・・・仕方がない、まずこいつがどんなやつか調べてみるか。父さん、父さんの部屋の資料だけ見てもいいか？」

「ああ、好きなだけ見てもいいぞ。」

その言葉を受けて、彼はすぐに工藤邸へと向かつたのであつた。

回想 怪盗キッドとの初手合せ（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

「へえ、コナン君のお父さんがね。それでどうなったの？」

皐月は話の続きを書いつゝに、哀に促した。

「彼は直ぐに怪盗キッドに関する資料を集めて調べ始めたわ。予告状もだいぶ苦労したみたいだけど解いたわ。そしてあの3月31日の深夜を迎えて・・・」

時計の針は11時半を回ったところであった。この日博士は大学時代の友人の所へ出掛けていて、阿笠邸に残されているのはコナンと哀の2人だけであった。

普段ならリビングで博士がパソコンをしながらテレビを見ている時間であったが、彼がいない今、家全体を闇が包んでいた。哀は寝ているか、起きていても地下の研究室にいるはずだ。

コナンはそつと自分の部屋から抜け出して、真っ暗な階段を音を立てないようにして降りていき、リビングを抜けて玄関に向かった。

だが彼がドアノブに手をかけた瞬間、突然闇の中から声がした。

「あら、こんな時間に一体どこへ行く気かしら？」

コナンは驚き、慌てて声のしたほうに振り向いた。すでに数分間闇の中にいたおかげで目は慣れている。だからリビングの少し離れ

たところに置かれていた椅子の上に、哀が座っているのは直ぐにわかつた。

「灰原、お前がうしてここに？」

哀がなんでここにいるのか、コナンには訳がわからなかつた。

「あなたこそ、こんな時間に子供一人でどこへ行こうとしているのかしら？良い子はとっくに寝る時間よ。」

哀はそのように言つたが、落ち着いて言つてゐることから、突発的に彼と会つたわけではないらしい。だから、コナンにはすぐにわかつた。彼女がここで待ち伏せしていたこと。

「なんでわかつたんだ？俺がこの時間に出て行くことを。

すると哀は何を言つてゐるんだと言わんばかりに笑つた。

「だつてあなた、お風呂を出てから随分と時間を氣にしていたじゃない。あれは何かする時間を氣にしていたからでしょ？それに、昨日まではずっと資料を漁つたり地図と睨めっこしていたのに、今日は家で大人しくじつとしていたじゃない。ということは予告状の意味がわかつて、夜に出掛けるための体力を温存していたんじゃないの？それでちょっと気になつてね。」

図星であった。コナンは彼女の洞察力、いや推理力に舌を巻いた。

「へえ、お前も探偵向きなんじゃないか？そこまで推理できるのなあ。」

「あら、私はべつに深く推理したわけじゃないわ。普段のあなたの行動から推測しただけ。」

すると、コナンは感心したよつて言った。

「なるほど、伊達に2ヶ月近く一緒に暮らしているだけあるつてことか？・・・それで、俺をびりするんだ？引き止めるのか？」

その言葉に、哀はクスッと笑つた。

「あなたのじとだから、びりせ止めても行くんでしょ？」

哀の予想通り、コナンは不敵に笑つて答えた。

「ああ。」

そしてもう一言付け加えた。

「なんなら、お前も行くか？」

「それでどうなつたの？」

皐月が興味津々で哀に聞く。

「まあ、びりせ暇だつたから。私もついていつてあげる」と云つたつわ。

「あら、それじゃああなたもその時、怪盗キッドに会いに行つたつ

「まあうそつなるわね。」

「まあうそつなるわね。」

セイで哀は話を区切って、お茶を一口飲んだ。

「ううだつたんだ・・・けど哀、ちよつとおかしくない。自分の関係ないことに口を挟んだりしないあなたが、どうしてコナン君についていくまうを選んだのよ？」

その途端、哀の表情が歪んだ。

「え、なんとなくよ。ただあの時はついていきたくなつただけよ。それ以外のなんでもないわ。」

哀は言い訳を言つたが、皐月の表情は綻んでいた。

「ふーん、コナン君と一緒に行きたかったからじやないの？」

その途端、哀は明らかに戸惑つた。

「えー? なんでうそつなるのよ?」

普段は冷静沈着、クールな面ばかりで知られる彼女も、姉の前では素直に表情を表した。

「だつてうそつじやないの?」

皐月はしつこく聞き出したりと予測したのか、哀は話題をすぐに変えた。

「もう、話の続きをするわよ。」

夜の米花町を2つの小さな影が走っていく。コナンと哀の2人である。3月の終わりとはいえ、まだまだ夜は肌寒い。白い息を吐きながら、2人は静まり返った街を走り抜けていく。

走っている間に、哀はコナンから予告状の内容について聞き出していた。（内容については「ミック16巻そのままです。）

「……とにかく。わかったか？」

「ええ。けどその怪盗1412号って中々やるわね。あの短い予告状の中でそれだけのことを含ませるなんて。」

まさか哀も、予告状の内容にBS放送の電波発進位置や放送中断時間を利用するなど想像できなかつた。

「ああ、漆黒の星の頭文字からBS放送つて思い浮かべるなんて、普通の人間じゃ簡単には気づかない。最初はただの泥棒つてなめていたけど、どうやらあだ名は伊達じゃないみたいだな。」

「あだ名っ？」

哀は首を傾げた。

「ああ、父さんの資料を調べてわかつたんだ。奴は18年前のパリに現れ、その10年後に一端は姿を消したんだ。ところが最近にな

つて日本で再び現れたんだ。奴の盗みは鮮やかで、その手口から色々なあだ名で呼ばれている。「平成のルパン」、「月下の奇術師」、それこそ数え上げれば両手を使つても足りないくらいにな。けどその中でも特に親しまれている名があるんだ。」

「それは一体?」

哀が聞こうとしたとき、2人は目的地である杯戸シティホテルへと着いた。

「悪い、続きをまた後だ。急がないといけないから。」

2人はそのままエレベーターと階段を使って一気に屋上へと駆け上がった。

屋上はさすがに高いだけあって、風が吹いていたが危険という程ではなかつた。コナンは直ぐにあたりを見回した。

「ええと、米花美術館は・・・あそこか。」

煌々と明かりがつき、ヘリが飛び回つている場所を確認すると、彼はその方向にロケット花火を置いた。

「これで準備完了だ。」

コナンが全てをやり終えると、哀は先ほどの話の続きをすりよつ求めた。

「それで、さつきの続きをだけど。」

「ああ。怪盗1412号のあだ名のことだつたな。さつきも言つたとおり、やつにつけられた形容詞は多い。そんな中で、ある若手の小説家が各国の警察をまるで子供のように手玉にとることから、1412の番号を洒落てK、I、D、つまりキッドと呼んだんだ。それが奴の最も有名なあだ名になつた。怪盗キッド・・・・」

その途端コナンは絶句していた。哀も彼の表情と、ただなりぬ気配を感じて振り返つた。

「――」

2人の視線の先に、奴はいた。何もかも見透かした不適な笑みを浮かべて。

回想 怪盗キッドとの初手合せ 2（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

「コナンと哀は信じられない思いだつた。なにせ彼が降り立つまで全く気づけなかつたのだ。だが、2人が驚いていた時間は短かつた。すぐに落ち着くと、コナンは持つてきたロケットの花火の発射準備をし、哀はキッドをじつと観察し始めた。

「ええ！？ それじゃあ、あなたキッドの顔見たの？」

意外な哀の体験に、皐月も驚く。

「まあね。」

一方の哀は、いつもどおりのすまし顔である。まるで特別なことではなかつたかのような態度である。まあ皐月の方も、それが哀の性格であるから、そんなことで文句を言つたり突つ込んだりはしない。

「それで、彼の顔つてどんな感じだつたの？」

皐月も人の子。それが大いに気になった。

「うーん、細かいところはわからなかつたわ。彼つたら、モノクルを掛けっていたし、ちょうどその時は月に対して逆行になつていたから。・・・ ただね、思つていたより若い感じがしたわ。20代、もしかしたら10代だったかもしれないわ。」

「へええ、それでどうなったの？」

「それでね・・・」

キッドは降り立つと、2人の方へと歩いてきた。

「よお、ボウズ。それにお嬢ちゃん。こんな所で何してるんだ？」

彼の問いに、コナンも哀も答えなかつた。それどころか無視するかのように、コナンはロケット花火に火をつけた。

春の夜空に不相応な花が打ちあがり、パンという音ともに小さな花を夜空に咲かせた。

「花火だよ。」

「コナンはまるで本当の子供のように、無邪気な声で言つた。そしてそのまま続ける。

「あーホラ、ヘリコプター……」つむづつ氣づいたみたいだよー。」

花火の閃光と音に反応して、美術館上空のヘリコプターが向かってきた。先ほどのロケット花火はこのためにしたのだった。

だがその様子を見たとき、哀は呆れたような表情をしていた。

（なにくさい演技しているのかしら?）の人は?

もつとも、内心で呟いただけであるから、「コナンもキッドも哀がそんなことを考えていることには気づかなかつた。

「ボウズ、ただのガキじゃないな?」

「江戸川コナン、探偵さ。」

キッドに聞かれる形で、いつもどおりのキメ台詞を囁つたコナン。だが、哀はこの時は何故か彼をバカにするよつた感情は抱かない。むしろ、彼にときめくよつた感情を抱く。

ちなみにこの部分は、皐月には伝えたりしない。そんなことすれば、格好の話題提供になることを、彼女はちゃんとわきまえていたからだ。

閑話休題。

キッドはコナンに続いて、今度は哀に問いかけた。

「ほつ、探偵か。じゃあ、そちらのお嬢さんもただの者じゃないな?」

キッドはいきなり質問の矛先を哀に向けた。

「えー? 私は?」

哀は答えに窮してしまつた。

「えー？ なんでそこで黙っちゃったのよ？」

皐月が不思議そうな表情をした。哀が何かを言ひるのが当然と言わんばかりの台詞だ。

「だつて、私は別に探偵でもなんでもないのよ。いきなり答えられるわけないじゃない。」

哀の方も当然とばかりに言つた。確かに哀はただたんに付いていつただけ（あくまで本人談だが。）なのだから、当然そんな台詞を言う必要はないし、だいいち持つていない。

だが皐月は不満そうである。

「別に、その助手ですか言つとけばいいのに。」

皐月の言葉に、哀はビクンと反応したが、残念なことに皐月は気づかなかつた。

哀は一瞬自分の中に芽生えた感情を振り払つよつて、話を続けた。

「話を続けるわよ。」

結局哀は答えることが出来なかつた。と、そこで彼女がコナンの方を見ると、彼が時計型麻酔銃を構えているのが見えた。どうやらキッドが逃げようとして、背中を見せる瞬間に麻酔針を打ち込む魂胆のようだ。

哀はその企みが上手く行くと思つた。

ところが、そこから先に起つた展開は、とうの哀、さらにはキッドについて勉強してきたコナンにとつても、あまりにも予想外のものだった。

「予想外の展開つて何よ？まさかマジックショウみたいに煙を出して消えちゃつたとか？」

皐月が冗談のつもりで言つたが、哀は笑い飛ばすようなことはしなかつた。それどころか、途轍もなく眞面目な表情で言つた。

「まさか元通りよ。」

「ええ！…？？」

皐月は手を丸くして、声を上げてしまった。いくらなんでもそんなこと起きるわけがないと内心考えていただけに、驚きも2倍だった。

「ちょっと、一体どういってよー？」

「どうもこうもないわよ。キッドは江戸川君が予想したように逃げようとしたしなかつたわ。それどころか、無線を使って警察をおびき出したのよ。何人の声色を一人で操つてね。」

哀の言葉に、皐月は当然首を捻つた。

「それおかしくない？なんでキッドが警察をおびきよせるのよ？」

「それが彼の作戦だつたのよ。彼は警官たちが集まつてきた所で、閃光弾を炸裂させてその場の人間の目をくらませた。その間に警官に変装してまんまと逃げ去つたのよ。しかも入念にも、閃光弾を炸裂させる寸前にはグラライダーを広げて、まるで空から逃げるよう力モフラーージュしてね。」

哀の説明に臥月は納得した。

「なるほどね。けどす」いわ。敵を利用して逃げるなんて。さすがに怪盗キッドだけあるわね。」

「ええ。しかも彼は江戸川君に、宣戦布告して言つたのよ。」

「宣戦布告？」

臥月がキヨトンとした。

「そり。彼は消え去る寸前に江戸川君に対してもう言い残したのよ。怪盗はあざやかに獲物を盗み出す創造的な芸術家だが、探偵はその跡を見てなんくせつける、ただの批評家に過ぎねーんだぜ、つて。」

「うわああ・・・「ナン君にとつて屈辱以外の何物でもないわね。」

「ええ。けど、それが彼に火をつけたみたいだつたわ。今度あつたら絶対に逃がさない。その後何度もそう言つていたから。そしてキッドは次の予告状を残していたわ。その予告状自体は、暗号も何もないものだつた。ただ問題だつたのは、その場所が豪華客船の中で行われた鈴木財閥のパーティー会場だつたこと。まあそれも、工藤

君のお父さんが招待されたことで解決できたけどね。」「

哀はそこまで話を一旦切った。そしてお茶を口にする。

「そしてコナン君は盗賊キッドと再び戦ったわけね？」

「ええ。そして彼は負けないために色々準備したわ。おかげで二つともいろいろやらされたけどね。」「

「何をやられたのか？」

「それはね・・・」

哀はキッドと二回同じ間違えるまでの18日間の間に、コナンにせりされたことを説明した。

回想 怪盗キッドとの初手合せ 3（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

怪盗キッドが再び現れると予告した日まで約2週間、コナンは今度こそキッドを捕まえるべく、綿密な準備をしていた。もつとも、相手は神出鬼没な怪盗であるしコナン自身もやれることには限界があるから、罠を仕掛けるなど大規模なことは出来るわけがない。

そのためコナンのやることとこつたら、徹底的なデータ集めであった。新聞やニュースで取り上げられるような信憑性の高いものから、インターネットの掲示板に出るような些細な噂まで、それこそありとあらゆる情報を集めた。

そしてその作業に、哀もかりだされた。

「なんで私までこんなことしなきゃいけないのよ？」

「頼むよ、今度こそ絶対にあの嫌みつたらしいコソ泥を捕まえたいんだ！！あんな風にバカにされてこのまま引き下がれるかつて言うんだ！！」

「コナンには、キッドからあのような捨て台詞を言われたことがこれまで以上になく悔しかつたらしい。ただし、それは哀が巻き込まれる言い訳にすらならない。

「あのね、なんで私まで手伝わされるのかって聞いてるのよ？」

「だつて、他に頼める奴なんていないから。お前が一番頼りになつて信頼できるんだよ！な、だから頼むよ。」

「ナンガ」にまで低姿勢になるものだから、哀も折れざるを得なかつた。

「仕方がないわね。今回だけよ。」

哀はしづしづ薬の研究を中断し、コナンの仕事に協力することとなつた。

「ふーん・・・」

皐月は何故か意味ありげな視線を哀に向けた。

「な、何よ?」

「別に」。

哀の言葉に対し、皐月は答えをばぐらかした。

(やつぱつ志保・・・哀は「ナンガ」のことが好きなんじゃない。)

内心で皐月はこんなことを考えていた。口に出せなかつたのは、言つてもどうせ哀がムキになつて反論してくるだけだと考えたからだ。哀をからかう(特にコナンをネタにして)のは面白いのだが、反応がいつも同じだとやはり飽きてくる。それに話の途中である。皐月はちやんとタイミングとこつものをわかつていた。

「それで、それからどうなつたの?」

皐月は話を元に戻した。

「それからは毎日パソコンの画面と睨めっこよ。色々な掲示板とか、個人ページに載っている些細な情報まで調べたわ。その中で目ぼしい情報を江戸川君に渡したわ。そんな感じであつという間に時間は過ぎていったんだけど、まさかあんなことになるとは思わなかつたわ・・・」

「あんなこと?」

パーティまで数日に迫つたある日。哀は着せ替え人形になつていた。

「うーん、哀ちゃんは可愛いからどんな服でも似合つわね。けど、やっぱり大人っぽい落ちついた服が一番良いかな?」

嬉々と子供用のドレスを選ぶのはコナン、つまりは新一の母親である有紀子だ。先日は父親の優作がいきなり帰つてきたと思つたら、今度は彼女が日本に帰つてきた。

ちなみに優作はあの後も日本に留まつてゐる。そして締め切りに追われる毎日だ。だが、キッドが予告してきた船上パーティーの日だけは空けてあつた。

さて、いきなり帰つてきたと思つたら、有紀子はそれまたいきなり哀を工藤邸に連れ込んで、どこからか持ち込んだ大量のパーティ用の服を着させ始めたのだ。

「あの、なんで」などなことを?」

訳がわからないうちに着せ替え人形状態となつた哀が、困惑しながら有紀子に尋ねた。

「だつて哀ちゃんもパーティーに参加するんじょ? 女の子だつたらそれなりにおしゃれしなきや。」

何を当然のこととと言わんばかりの表情で言つ有紀子。

「えー? 私はパーティーには・・・」

哀はあまり人が多いところは好きではない。慣れていないということもあるが、いつぞこの組織の人間に顔を見られたものかわかつたものではない。

「出ないの?」

有紀子が首を傾げた。

「あの、ほら、私子供の頃の顔も組織に知られているから。だから・・・」

哀は歯切れの悪い返答をした。有紀子を落胆させてしまつと考えたからだ。

ところが、有紀子は落ち込むどころか、傾げていた顔を元に戻して、先ほどよりも明るい表情をした。

「なんだ、そんなこと。だつたら私に任せて。知り合いの美容院に

予約しておぐから。」

「えー? び、美容院?」

いきなりの急展開にまたも困惑する哀。

「そつよ。髪型を少し変えるだけで人の印象つて随分変わるものよ。それにそうね、新一じゃないけど、眼鏡をつければ大丈夫ね。安心して、新一みたいなダサいやつじゃなくて、あなたのピッタリの可愛い眼鏡を選んであげるから。」

「」の時哀はもはや有紀子を止めることと、自分がパーティーに出ないようにすることは不可能であることが悟った。ここまでされでは反論の余地なしである。

結局哀はズルズル引きずられる形で、パーティーに参加することとなつた。つまりは工藤一家に振り回されることとなつた。

「へえ、それは大変だつたわね。」

皐月はコナンの母親も父親も、見たことも会つたこともないから新鮮さを覚える反面、おもぢやにされた哀に同情した。

「おかげで結局パーティーに出る」とになつたし、美容院に連れて行かれるわ、着せ替え人形にされるわ、散々な目に遭つたわ。」

「うどこか疲れを含ませるよつて言つた哀。

「ナビ、ナハン君のお母さんもナビにそんないまつせつたのかしらね？」

「ああ？ それはさすがに、本人に聞かなきゃ わからないわ。」

哀は素つ氣無く言った。

ちなみに、その答えはどのような物だったかと云うと。単に娘が出来たようでは嬉しかったからという、至極単純なものであったが、これを哀が知るのはずっと後のことだ。

「けど、哀は確かに組織にいたこともおしゃれなんかしていなかつたら、ちよつといい機会だつたんじゃない？」

皐月が慰めるように言った。

「まあ全く嬉しくなつて言つたり嘘だけどね。」

「それで、一体どんな感じに変えたのよ。」

「えー？ そ、それはね・・・別に良いじゃない。そんなこと。」

「何よ教えてくれたつて良いじゃない。」

その時哀は、なんとかごまかしきつたが、結局数日後に博士がその時撮った写真を皐月に見せたために、その行動は徒労に終わるのであった。

回想 怪盗キッドとの初手合せ 4（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2643e/>

---

よみがえった少女

2010年10月10日15時10分発行